

536
5

青春
讚美

わかき日の
經典

永井陸奥郎著

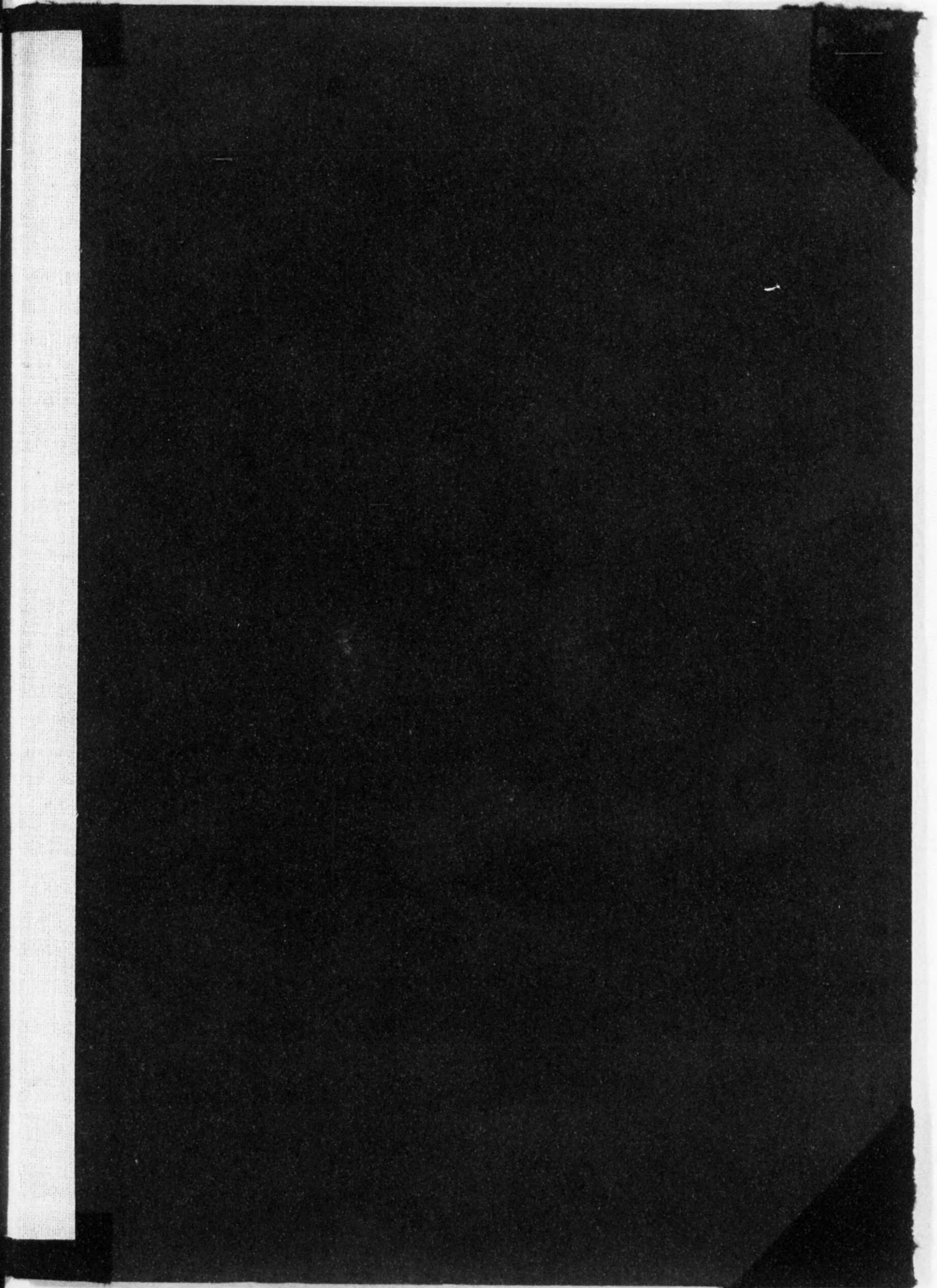


始



美讚春奇

あかぎの
経典





永井陸奥郎著

き日の經典

東京 東華書院 出版

大正
13. 29
内交

東京 東洋書局 出版

東洋書局 出版

序

單に私といふばかりではなく、すべての人々は、生れながらにして「人間とは全儼いかなるものなのであるのか、そして、いかなる生き方をなすべき、いきもの、であるのであらうか」といふ一つの大きい疑問、たとへてみれば、この世の人間學校の試験試問の課題でもいふべきであるところの、重いく、容積の馬鹿に大きな、動きの取れない程な、困難な、一つの荷物をば背負はされて來て居るやうなものである。

そして、學者、哲人、といはず、古人、今人、のあらゆる人間どものすべてが、おのがじし之れに對して、いろいろの苦惱もし、思索もし、發見もして、またいろいろの形式において、之れに向つて、答案やら、論文やら、解説やらを、提出したり、發表したり、書き遺こしたりもしてゐるのであるが、兎に角、その深淺大小種類の區別のときは別として、恐らくは、何人さいへども、人間としてこの大きな宿題に觸れることなく、全然不問に附してその一生を終はり得るといふことは不可能事であらうと私は思ふ。

536-5

本書のごときも、やはりその宿題に對する答案様の小さな一種類に屬すべき性質のもので、私の最も若かつた時代、最も多感な、最も苦惱の多かつた年代に、書きつづつた試験的で最初のな所作の一つなのであるが、當時としても、果して、自分の一つの所謂答案としてアルバイトをして世に發表する程の價值があつたかなかつたかは知らないのであるが——（勿論今まとすれば尙更のこと——）自分としてはたゞ一途に、人間といふものゝ疑問や、人生といふものゝ難題やを解決もし且つ又た、それ等のものに對する、自分としての根本的な見解なり思想なりをも主持して居たいといふ、悪くいへば生意氣で出過ぎた、善くいへば勇敢な念願のあまりに、試みた仕事の一結晶であつたのである、が、しかもまた一面からいふと、當時いろ／＼の思索にあぐねた結果、やたらに書きこゝろみた年少懷疑の思想の一産物だともいはるべき性質のものでもあるのだ。

こんな幼遅な、古々しい、所謂人間學校の一年生の答案様なるものを、現在の讀書界に出版して大方の示教を俟つと云つたところで、臆面もない時代錯誤の愚行爲として、忽ち世人の嗤ひを招くに過ぎないことは勿論であり、且又た自分としたところで、心中甚だ忸怩たるまゝのものがないでもないが、しかし當時の私の仕事としては、可なり眞剣な立場からの努力でもあつたのである

し、尙ほまた、一面には、いはゆる、學者ぶつた、哲人ぶつた、批判的な、論理的な、研究的な考證的な、學問臭い態度からではなく、非學問的な、非學者的な、非教養的な、荒削りの、人間丸出しの私共普通一般人の欲念そのまゝの、若かい時代の心胸に旺盛として湧き立つ、奔放な、そして猪突的な、思想なり空想なり感情なりの或るものを、最も端的に、最も露骨的に、最も直感的に最も元素的に、促へて見たいと思つてこゝろみた試作——いはゞ、自分みづからこそは即ちその、平凡で無學で一般的な一人間であり、且つ非學問的な思想の持主であつたので、丁度その胸奥に燃え上がる、あまり先入的智識に煩はされて居ない、普通人としての純な青春期に於ける思疑情感の傾向を、出來得るだけ嚴肅な態度で、具體化して見たいと企てた試作——は即ちこの一書であつたので、之れを要するに、つまるところは、或る一人の——極めて非文士的な——極めて自然兒的な——極めて野人的な——極めて世俗的な——極めて非學者的な——生活者の……心境記録の第一部輯として、今まで世に出だすの機會もなくして打過ぎて居たものを、多少字句章節の修正をしたり、編述の體裁などを整へたりして、この度世に出すに到つたものである……ぐらゐにでも思つて、讀んでくれる人でもあれば、私としては甚だ本懐の至りである。

必要の一例	三
美しき肉體	三二
糞汁の酒	三二
新しき事相	三三
新しき解釋	三三
新しき感激	三四
批難の痴者	三四
解嘲	三五
社會之人	三五
人生の道德則	三六
若かき認識論	三七
若かき戀愛觀	三八
存在の危機	三九

第二門 (諷詠篇)

諷詠の姿	四二
彼の子の曲	四三
契りにし少女	四八
春野の歡語	四九
美しき友	五〇
二人の友	五一
天才の人	五二
少女の賦	五四
輝ける月	五五
行路の人	五七
星と波	五八
都會の子	五九

今夕の睡眠	五九
疑問の中	六三
山と海	六五
波上行	六六
五彩の雲	六七
この花	六九
逝く春	七〇
途上の頑石	七〇
星の光	七一
黄金の美酒	七二
杯中の酒	七三
酔中の君	七三
花の驕態	七四
罪惡	七四

高き姿	七五
悠久の天地	七五
會心の友	七六
花蔭の夢	七六

第三門 (辯難篇)

人間讚頌辭	七九
人間の傳記	八〇
悟脱の辯	八一
高慢人	八二
山頭の風月	八三
終極の抱負	八四
偶然の存在	八五
今日の安神	八八

死の影	頂嶺	鏤刻の彩	人間の眞價	敵	寶玉	明日の價値	心の子	天の榮光	矛盾の眞理	學者の標象	人生の至樂	心靈と肉體	醉生夢死論
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：一〇六	：一〇七	：一〇七	：一〇八	：一〇八	：一〇九	：一一〇	：一一一	：一一二	：一一三	：一一三	：一一四	：一一四	：一一五

第一門

(提唱篇)

若かき日

およそ、人それ若かき日にありては、その血は漲り、その瞳耀やく、その頬は朱けにして、その希望は大は、その口は緊りて、その心は強し、思ふところとしてみな華やかに、見るまじきところとしてみな勇ましし、過去を追懐するには、その氣はあまりに旺盛にすぎ、人に遜らんとするには、その理想あまりに高し。

お、然り、人生は恒久の雲より出で、恒久の曠野に彷徨し、世路は多難にして辛苦陰慘魂ひを消すも、しかもこの起伏の途上に於て、君と吾れとは地上に立つていま最も若かし、詩に、歌に、この日においてわれ等は長嘯す、吐發せんとするまじきところは、夫れ、光焰乎珠玉乎。

1
お、人よ、わが昂々の意氣をして須らく拘束するところ莫らしめよ、白駒高く嘶いて春風

2 　に驕るの態、而して刮目して、滿腔の磊塊を吐くを視よ。

時世と人間

偉大なる時世は、偉大なる人間を作る乎、偉大なる人間は、偉大なる時世を造る乎、そはわれ等の深く關知するところにはあらず。

わが腦裏には、高遠超邁なるの理想あり、吾れをして古代羅馬國の勃興時代に生れしめよ、吾れは必ず、シーザル—アントニー—ミならずして措くものならんや。

わが脈管には、熱つき血潮の充てるあり、吾れをしてイングランド國なる、スチャート王家の時代に生れしめよ、吾れは必ず、驕雄クロムウエル、とならずして何ぞ徒死すべけん。

わが胸底には、亢かき鼓動の調べあり、吾れをして、フランス國なる、革命前後の時代に生れしめよ、吾れは必ず、怪傑ナポレオン　とならずして休むものにはあらざるなり。

わが希ふところは、活動と快心であり、軍人となりて、安樂椅子に甘眠し——政治家となりて、議場の欠伸に苦しみ——物質學者となりて、終日、細胞のプロトプラズマを計算し——學校教授となりて、學生教段の原理を云々するがときは、熱つき血潮に活ける吾れの、到底能くすべきところにはあらず。

わが望むところは、生々き歡喜にあり、果進的勳章と——無味なる議案と——煩瑣なる技術と——古るき書籍とは——強き鼓動に働ける吾れに於て、將た幾何の價值かある。

わが欲するところは、邁往と直進にあり、秩序的階級と——平凡なる人間と——因襲的社會組織と——不快なる多數制度とは——高かき理想に生働せる吾れに取りては、殆んど、路傍の雜草にだも若かざらめ。

大學と——議院と——軍艦と——顯微鏡と——こは則ち今の世の示して以つて誇るどころしかも、沐猴の冠は、ついに褒貶の一擲といづれぞや、吾れは寧ろ、美しき少女と、色佳き葡萄酒に換へんかな。

人よ、吾れを以つて力なき子と嘲ける勿れ、バイロン既に義軍のためには、劍を執るを辭せず、ケルネル亦た祖國のためには、彈丸を味ふを喜べり、吾れに於てのみ、豈に之れ獨

り不可能の事となすべけんや。
 遮莫、吾れいま、人に對して多く勇剛壯武の談を爲さず、且つ又、みだりに深玄幽味の理を宣べず、吾れは、春深くして風馨んばしきころ、美しきかの少女を抱擁きて、樂しき今日をぞ歡語らんとす、お、誰れかある……吾がために一盞の葡萄酒を齎て！

吾が生涯

哲學といひ、宗教といひ、道德といひ、倫理といひ、強いてみな是れ、わが人生の意義をば探らんと謂ふ——むづかしの世や……。
 人世の意義、果して、ありやなしや、過去や、未來や、實在や、因果や、形示上なるもの形示下なるもの、來世を慾求するもの、現實に執着するもの、靈魂を認識するもの、物質を萬能視するもの、理想に、主義に、思索に、行動に、個中の眞理、或ひは之れあらん。さばれ、われをして言はしめば、人にして己でに明日の死命、自らこれを揣かるの權能あることなし、如かず、煩瑣なる多くの學語と、復雜なる論理の説述とを、限定若しくは放棄して、吾が生涯をして、いま少しく簡短なるものならしめんには……、簡短にして、

而して、價值と光榮との充實せるものならしめんには……。

存在の意義

軒に遊ぶ雀に、彼れがこの世の存在を問へ。

軟風にさゝやくかれが輕ろやかなる羽撃きは、樂しき戀をば描きて、子の巢をつくらんがため……さ答ふるにあらずや。

野に咲く百合花に、彼れがこの世の存在を問へ。

朝陽にもたげしかれがいと麗はしき姿は、活きたる心を捧げて、愛せられんがため……と答ふるにあらずや。

お、人よ、希はくば若かき年代の唇より發出する、わが痛切なる叫びを聽け。

われはいま、野の百合花ならんことを欲し、軒の雀とならんことを欲す、樂しき戀と——活きたる心——、やがてはこれ、われに於ても亦た存在の第一義なれ。

人生の意味

吾人の性は、言はずして、動く、の間にあらめ、吾人の情は、思はずして、爲す、の間にあらめ。

人の寒くして、火を要するまき、何ぞこれに對して、その何故に寒きかを、詳問するの邊あるものあらんや。

人生の意味、則ちその機微生動の中にこそ存せざらめやも。

心内の要求

好める酒杯は、禁すべからず、喫み得ざる苦樂は、強ゆべからず。

人の心は、素こそれ表裏一面の鏡のごとけん、迷ふて情に入る、其れ可なりとす、悟つて理に返へる、亦た可なりとす、母を慕ふと、父を戀ふとは、子の心において、敢て悖るところあるものならんや。

要は、心内の要求に、憚らずして従ふにあらんなれ。

眞の信仰

罷むさく生ひたるものよ、汝がむくつけき口端に、みだりに、信仰の法悦をば説くを休めよ。

汝の信仰とは、すなはち、常に、我田引水的、復雜の教義と、望洋不可解なる、虚妄の解説とを、要する信仰の謂ひにあらんや。

おゝそれ、既に、牽强的教義と、附會的解説とを要する信仰、疑問は之れあらめ、いかでかわれ等が心靈の、安定をばはかり得べきぞ。

人よ、やよ、理の筈とを棄て、すべからく、わが言に聽け。

一夕、星白くかがやきて、花の香の妙へなるあたり、ゆいて先づそれ、少女がやわ肌を抱擁だけ、ゆいて先づそれ、少女が唇に觸接れよ、ゆいて先づそれ、少女が涙に浸潤れよ。しからは、汝は之れによつて、そこに、教理と解説とを要せざる、超越無碍なる、新しき感激をば與へられん、宇宙や、人生や、生命や、慾求や、この時こゝにおいて、復た、何等の疑問があるべき。

乞ふ、人よ、われをしていま、わが若かき血のたぎり立つ、むらぎもの胸をば丁とうち叩きて、言下に憚らずして、卒直に告白せしめよ。

教理と、解説とを要せずして、而して、些の疑問なき感激、これよ則ち、わが法悦境なる
純正無垢なる眞の信仰にてありぬべきかな——と。

寂寥の供給

われは野の花の色濃きごとく、若かき少女の品善きをこそ愛せ、われは火山の燃ゆるがごとく、出づる呼吸の熱つきをこそ愛せ、われは葉末の露の清きがごとく、濺そぐ涙の美しきをこそ愛せ、冷靜空膜にして、些の反動なく、弾力なき、寂寥の姿のごときは、わかき吾等にとりては、あまりに便りなく、あまりに無残なる、伴侶たるなからず。
われは曾てひとたび、寂寥の姿の前に立ちぬ。

寂寥の姿は、われに血を與へずして、恐怖を與へたり、微笑みを與へずして、悲哀みを與へたり、歡喜をば與へずして、憂愁をぞ與へたり、華やかなる活動を與へずして、重苦しき沈思をば與へたり、誰れかいふ、麵包を望んで石を得たるものは幸福ひなりと、さなり、寂寥の姿の吾等に給與するところは、畢竟、石のごとき冷氣のみなれ、われは若かき子、ついに豈にそれ、かくのごときの、冷氣と空虚の姿に堪ふべけんやわ。

吾が生命

天の高かきをいはず、
地の潤ろきをいはず、
わが生命は、胸の鼓動ぞかし。

靈在の久遠も、
物質の不盡も、
いまわが生命に、何をかなさん。

古聖も曰ひけらく、
一息逐はざれば……………
千載長へに逝く——と。

天の高かきをいはず、
地の潤ろきをいはず、
わが生命は、けに胸の鼓動ぞかし。

人生の歸趣

婆心に富み且つ親切にゆたかなる人、その手を八方に振り動かして、敢ていま、吾等に人生の歸趣をば教へ示さんといふ。
おゝ好漢よ、われは汝を愛し、汝の事業の偉大なるを嘆美し、汝が懸命なる流汗の奔走をば痛ふ、而して、われは、ほゝるゑとまことの心をもちつて、げにや汝の眞面目なる勞苦に感謝せんと欲す。
しかれども、乞ふらくは、汝のあまりに手を打ち振るに由つて、間關として今し枝上に轉づる、無心なるかの小禽ことりの歌をば驚かすなからんことを……………。

若かき時

野に、鳥歌ひ、川に、水流る……………。
わかき時、何故に遊ばざる、何故に戀せざる、苦學は、汝に、何を教ゆるや、麵包の收穫乎、あらず、苦にがき顔乎。
おゝ、われをして、言はしめよ、麥の實の蒔るべき日をのみこれ急ぎて、春の花の散り去らんことの早きを禱るは、あまりに、實利的打算に過ぎたり——。
野に、鳥歌ひ、川に、水流る……………。

若かき生活

醒めての後の、苦しさよ、いふこと勿れ。
葡萄の美酒、君その味ひを知るや、薔薇の芬芳、君その香氣をば退くるや、乞ふ、かのわかき祝ぎ歌を聴け、日暮れざるに、雨降らざるに、誰たか急ぎて、遊宴うたひの席むしろを疊まんとはするものぞ。

若かき日に、若かき人生を悞しみ、若かき時、若かき生活を送る、亦た可ならずや。

若かき眞理

夕べには、終に沈むべき日陽と、いふこと勿れ。

物に永世の性象すがたなければ、われに百年の紅顔あるなし、不變の匂ひは花に求め難くして、少年の日のいと惶だし、およさはれ、朝貌の花の、一と盛り、露のひぬ間を倣る色にも、教訓おしへあり、寓意ざとしあり。

若かき日に、若かき行動を爲し、若かき時、若かき眞理に生くる、亦た可ならずや。

若かき感想

思慮なき、繪空事よと、いふこと勿れ。

感情の火力は、若かき子の血をして、たゞ、若かき活動の中に、耀やかならしむ、黄鳥やういす啼きて庭の木に、春の囁やきを告ぐるとき、誰れかこれをば、朝なく、曉の來明を報ずる群鴉からすの實用に比して、退け去らんとはするものぞ。

若かき日に、若かき希望に生き、若かき時、若かき感想を暢ぶる、亦た可ならずや。

若かき歡樂

人に百歳の、壽きありと、いふこと勿れ。

月に虧げざるの、月あることなく、古人今人、流るゝ水のごとし、年々相似るの花の色香は、歳々消褪する人間の顔色と、常に相對す。

若かき日に、若かき人を思ひ、若かき時、若かき歡樂に耽ける、亦た可ならずや。

若かき戀情

濁りて、穢れたる、汝の戀情は知らず、若かきその日の戀情こそ、げにたぐひなき純一眞一美、なれ。

想へ、燦々として、光輝ある海中の秘玉ひみたまにも似たらん彼女の明眸を仰ぎ見るとき、身を忘れ、世を忘れて、そこにはたゞ、うらわかき心の、いとまことなる羞らひのみ湧きいでなむ。

かくしてぞ、わが世にありて、若かき日の戀情の、尊ぶとさも見め……。

若かき現實

小智のともがらよ、迷蒙の議論者よ、無用の研究者たちよ、何すれぞ其れ、終日、書齋と
仕事場にのみ閉ぢ籠りて、ごつ／＼として徒勞することのしかく執念なるや。

脚とたび戸外に出づれば、柳みどりに、花くれなひなり、草木は新生し、生物は嬉々と
してたのしみ、軟風は南より吹き、日陽は赫灼として光被す。

しかも、若かきものは、若かき緊張と、若かき矜持とをもつて、いたづらに古るき情實の
前に願望低回することなく、梢頭のそよ風に木葉の欣翻するがごとくに、若かき運動と、
若かき現實に、突々として活きつゝあり。

おゝ、彼れにはいま、考古無稽の癖習に囚はれて、廢物無用なる渾沌世界の過去を識らんと
するの必要もなく、幽昧の志をもつて。進化的夢現未來の到着を杞憂する餘裕もなし。

おゝ、かれ等の生活は、最も率直にして最も現實なる今日を尊び、しかうして、最も快活な
る幸福の願望に生きんとするにあり、鳥の歌を聴き、獸の走るを見、水のながるゝに隨ひ、

花のこぼるゝに戯れて、かれの前にはいま一切の不可解あることなし。

やよ、重荷の堪へがたきを負ふて、萬里の道程に喘へぐがごとき、小智、迷蒙、無用、の
學者たる汝等よ、何ぞ來りて萬有推移の人間史の繫縛の上に超然特立して羈束なき、わ
が新生の謳歌者とはならざるや、又何ぞ若かき現實のたのしさをば讚美して、三嘆渴仰、
衷心の眞情をば捧さげぬかづかざる……。

若かき恐怖

われは、猛獸の、咆吼を怖れず、

われは、雷霆の、鳴動を懼れず、

われは、暴君の、威嚇を恐れず。

おゝわれは、たゞ、時刻を怖る、

おゝわれは、たゞ、時刻の力を懼る、

おゝわれは、たゞ、少年と少女を奪ひ去る、時刻の力の慘酷を恐る……。

若かき謙遜

おゝ君よ。

われは恒ねに、鳥の歌ふがごとくに歌ひ、水の流るゝがごとくに流れ、南風の來るがごとく來り、木葉の戦よぐがごとく戦よぐ。

われは、若かき日の人生において、冗漫にして複雑なる、鈍重の豫備知識をば必要とせず、高徹明透なる頭腦と性格の所有者は、物に停屯するところなく、凝滞するところなし、必要に際し、事變の利那において、常に天才的にして遺漏なき、應急叡敏の上智をば發現せしむ。

かるがゆへに、古るき知見に饒み、多く書を読みしを誇る年老者の前に立ちて、若かきわれはつねに謙遜りて言ふ。

おゝ、汝は潤き溜池にして、吾れは細き流れなり——と。

若かき死

人誰れか、若かくして、且つ、美しきを欲せざらん、
人誰れか、老いて、且つ、醜きを哀しまざらん。

われに、一人の友ありとせよ、

而して、彼れは、若かくして死したりとせよ。

彼れの死は、死にあらずして、

若かくして限りなく生きんがためなり。

若かき追憶

老いたるものよ、

分別くさきものよ、

いにし昔の

汝等が若かき日をかへりみよ。

其處には、乃ち、

長閑なる、春の野は展開す、

其處には、廻ち、

蜜のごとき、歡語の囁やきを聴く、

鳥は、樹にありて啼き、

水は、野を纏ふて流がる、

晴れわたる空は、澄み、

ひろく、き海は、蒼し……。

さなり……。

海は、蒼く、

空は、澄み、

水は、流れて、

鳥は、鳴き、

歡語は、蜜のごとく、
春の野は、長閑なり。

お、

老いたるものよ、

分別くさきものよ、

汝等は果してこの境地をば、

何とか見しや。

お、見よ、

わかきものは、

わかき聲帯の、顫動をもつて、

かどやく瞳の、憧憬をもつて、

頂天—立地、

いまし、この境地にありて、
青春一代の、懷抱をば暢べんとす。

おゝそこに何等の――

非法行爲もなく

おゝまたそこに何等の――

罪の構成あらんや。

おゝ、

老いたるものよ、

分別くさきものよ、

願はくば、汝等須らく若かき年代人に對つて
徒爾なる念慮の不快を棄てよ。

而して、若かき子の若かき言説ミ――

若かき行爲の――發露を尤がむるの心を轉じて、

何すれぞ、いまひとたび、

汝等が、わかくして悞しかりし日の、

甘き夢なる、追憶に酔はざるや。

おゝ、

そこにはのどかなる春の野の映寫は展開し、

そこには蜜の如き歡語のさよめきを聞き、

海は遠蒼く

空は高澄み

水は曲流して

欣々として鳥は靈妙の音律を奏しつゝ鳴く……。

人ありて、

われに汝の、國はと問へ。

國とは……………、

わが心の嚮ふところ、

心の最も慕ふところ、

高かき鼓動のあるところ、

聖よき少女の住むところ。

而して、大なる感激の伴ふところ、

おゝ、しかり

感激の伴はざる國は、

われ遂いに去らんかな。

覺 悟

人ありて、

われに、汝の覺悟はと問へ。

覺悟とは……………、

世界の因循の揮べを、

敵として戦ふの覺悟、

世界の元氣のすべてを、

味方として親しむの覺悟。

さはれ、居常は、

モレアの丘に夕づく日のごとく、

いこも靜かに、
活けるほゝ笑みの中にあらんかし。

人の行末

さながらに、
さうびの色こそむる頬の、
さめてはさびしけれ、
人のゆくする。

甕と水

若かき時代は、若かきものをして、若かき主張こそ若かき活動あらしめよ、老いたる時代は
老いたるものをして、老いたる分別こそ老いたる退隱あらしめよ。
かくのごときは、これ正に、尋常なる世態ぞかし、しかり尋常なる世態ぞかし。
しかも、尙ほこの自明の理を解せず、若かきものゝ、若かき主張こそ若かき活動を矯め、老

いたるものゝ、老いたる分別と老いたる退隱こそ強ひんごするがごときは………
まさに之れ、新しき甕の形質をば打壊りて、古るく酸へたる水をば盛らんごするにも等しか
らん乎。

おゝ、吾人は苟しくも是れを採る能はず………。

散り去る花

われは絶對に焦るゝを知らず、われは無極を望むを識らず、われは水の甘きに就く小羊の
ごこく、われは草の匂ひ佳きに行く胡蝶のごこけん。
おゝ、われはたゞ、散り去る花となりて、流水のゆくごころに隨ふあらんのみ。

花の生

25
發らくべきものをして、
發らかしめよ、
散るべきものをして、

散らしめよ。

しかり、

しかうして、

短かき花の生をば、

問ふこゝなかれ。

花の重量

われをして花たらしめば、願はくば汝が杯中の花たらしめよ。

春光和暖の日、吹くなよ風の情けにさそはれて、おのづからなる、綻びをなし、やがては、
卍字巴のごまぐ、翩翩飄零、來りて杯中に散り浮くものは、それわが花の風姿にあらず
や。

敢て告ぐ、軽くして自車なき生涯よこ嘲けるながれ、軽きはげに花の本體ならなくに、何
者の迂濶漢か、遂にその口にせる杯をばくつがへして、散り浮く花の重量をば計測せんミ
する。

花と果

われをして今、花ミ果に就いて謂はしめよ。

花ミ果は、場合に於ては、げに好個なる對比にあらずや、われは之れを以つて直ちに、肉
體ミ精神においてのみこは曰はざるべし。

しかも、果の酸きをのみこれ薦めて、花の香り佳きをば棄てしむる論議のごまきは、われ
斷じてこれを探ることなし。

自然の殿堂

われは自然の爛漫にして他意なきを知る、われは自然の嚴格にして慈愛ふかきを識る。

しかも、われをして自然そのものを愛慕せしめんミするには、彼れの受容は、あまりに深

大廣潤にしてたよりなきかな。
おゝ、寂々たる大殿堂よ！

火桶と牧場

老いたるものをば、
老いたるものをして、
古るき火桶に凭らしめよ。

若かきものをば、
若かきものをして、
新しき牧場の空氣の中に歌はしめよ。

味方

われは、活動を欲するが故に、活動を説く、われはうつくしきを愛するが故に、うつくし

きを興ぐ。

生々や、光明や **味方**、われにおいて威な、同じからざるこころなし。
人は、いづれも、味方のために戦ふものなればなり。

汝が救主

淋しけなる子よ、憂愁幽思して汝はいまいづくに行かんとするや。
汝の血管は弛緩して、汝の鼓動は沈静せり、來れ、吾人は汝の爲めに、汝の生命の救主を
與へなむ、そはかの美味なるあつき葡萄酒の杯と、うらわかき玉の光りの少女の肌なりミ
す、色よき葡萄酒は汝が血管の血を沸かしめ、緊張せる少女の玉肌は優しき心根をもつて
汝が鼓動を振起せしめん。
おゝ、しかうして、脈々として胸より胸に頰かたれつたはる、その亢奮の波うつ調節こそ
汝が消沈して衰褪したる魂ひの救主にてあらんかな。

自然の大道

うつくしき子をして、うつくしき歌をうたはしめ、うつくしき子をして、うつくしき舞ひをばまはしめよ。

これすなち、意義あるものに意義あらしめ、價值あるものに價值あらしむる、自然經緯の大道のみ。

醜穢なるもの、卑俗なるもの、汚辱なるもの、妬嫉なるもの、忌克なるもの、姦淫なるものをして、みだりにうつくしき説述をなすことをば許すことなかれ。

天與の特權なきものにして、天與の和樂を、天與の愛恩を竊取隠匿せんとする盗人のやからの如きは、われいま之れを、千里の外に排撃放逐せんと欲す。

驕りの眼

わかき日は、

みかどをいはず、

ほゝゑみに

わが眼こそは驕れ、

あめつちはある、

慧とき子

日影うらゝかに、風をよくと、花さき匂ふ野邊に立ちて……われは斯くぞ叫ばんとす

「慧とき子は、よく遊べ、遊ばざる子は、愚なり、鈍なり」——と。

超邁の子

みめ、たち、いと聖よく、いとうつくしき子よ。

汝は、世にすぐれて、超邁にして、美しき、思想の持主たれ

人間の生出

ほのかにも、海にうかべる、月のごとく……この世に、われの、うまれ來しかな。

必要の一例

必要ならざれば、神を願はず、道を求めず。
うらわかき、少女の涙と、色よき、葡萄酒の杯は、いまそれわが若かき生の存在にとりては、
必に要なる一例乎。

美しき肉體

うつくしき愛嬢を守護するにはそれ……
うつくしき城廓を築つけかし。

うつくしき心嚢を包裡、まんにはまた……
うつくしき肉體をば要すべけれ。

糞汁の酒

少年よ、少女よ。

身も、心も、汝の要素は純潔なれ……わかきもの、うつしきもの、やさしきもの、勇ましきもの、

活きたるもの、強よきもの、快樂なるもの、善行なるもの、多血なるもの、にして純潔ならずば、
糞汁の濁酒と何ぞ擇ばん。

肉體も、心情も、汝の要素は純真なれ……汚れたるもの、卑しきもの、愛せられざるもの、邪
情なるもの、悪欲なるもの、妬忌なるもの、放蕩なるもの、奸淫なるもの、娼嫉なるもの……
に到つては、すべてわが交遊の範圍より除外して、よろしく之れをば唾棄すべし。

おゝそれ、糞汁の酒！糞汁の酒！

新しき事相

歳に、春夏の區別ありて、秋冬の卷舒あり、物に、表裏の分野ありて、反覆の變化あり。

循環し、また、循環して、綿々として盡きざる歴史の過程は、連々として一貫する推移の鐵鎖に由
つて、緊密に繫縛せらる。

さはれ、新しくいまこゝに生れたるものにとりては、世界のすべては、即ちみな、新しき事相に過
ぎざらまし

新しき解釋

われは歴史の建設をば否定せず、われは過去學問の貢獻をば排斥せず、われは既成の社會組織をば呪詛せず、われは現存の生活條件をば破壊せず。

さはれ、われはいま唯だ、次ぎのごとくに宣布すべきの一個の主張と權利を有す。

世界の上に、今ま新しく存在を獲得したるものに對しては、世界のすべてのものに向つて、新しき解釋を下すべきの自由を得せしめよと。

新しき感激

やさしげなる子、誤解を恐れて、おのが言説を辯護していふ。

われは、多くの書冊を読み耽けりたり、われは、多くの文字を識り得たり、しかれども、わが言説は新しき感激なりかすと。

批難の痴者

うつくしき子、わかき日の詩をつくりて、市に立ちてうたはんごするとき、屋上の群鴉は啞々として、しきりに之れを批難したり。

うつくしき子、敢然として首をあげて、對へて曰はく、やよ痴者よ、わが詩は敢て拙悪ならんや、汝等の耳は歪形いびつにして、これを解するに適せざればなり——と。

解 嘲

わが友よ、汝がむづかしき口邊より、先づその嘲りの毒を去れ、汝がひややかなる眼眸より、先づその疑ひの色を解け。

しからざれば、汝は永久にわれを知るあたはず、わが本質と言説の眞義をば永久に識るあたはず。

社會と人

趣味うすき社會よ、活氣とほしき人よ。

汝は、何すれど蠢爾として虫のごとく動き、喘々焉として牛のごとく歩むのみなるや、たぎりたつわかき血潮に、生きんとし、伸びんとし、發せんごする、年代の子のわれは、倦怠ご、因循と、枯渴の氣に充ち滿つ汝等ご交はりて、こゝに沈鬱と憂悶とをば與へられたり。

咄、汝等によつて、いまわが胸の鼓動は靜止せられんとす、童僕よ早く新鮮なる葡萄酒の容器いれものを

持ち來たれ、われその數杯を傾けて後ち、壯烈敢爲なる、かの鷹鷲の翼をかりて、颯風に駕御するがごとくに、廣濶無邊際なるかの蒼穹の高きに翔り見ん。

人生の道德則

われはいま、かの一團の集落を指さして、「彼れ等」と呼ばんとす。

彼れ等はこの世に、長く生きたり、彼れ等の呼吸は、多くの炭酸に充つ、彼れ等の筋肉は緊張を失ひ、彼れ等の眼光は朦朧と、彼れ等は爲すべき、事物に倦めり、彼れ等の位置は固定せられたり、彼れ等の精神には些の感興もなく、よくその無趣味に堪ゆることを知り、彼れ等はみづから便器を要するときに於てすら、なほその席をば動かざらん力む。

しかも、直角なる幾巻の書籍は、彼れ等の手によつて編述せられ、命じて——人生の道德則——といふなる、而して、其書を評價するものは、醜くき子なりき、其書を讚美するものは、愛せられざる子なりき、而して又、二人の口によつて傳導は生まれり。

おゝ、われ堪ふべけんや、われ堪ふべけんや、頓首、頓首、伏して乞ふ、希はくは若かき年代の純真なる一駒と、美しき子の清興遊樂の一區劃のごときは、沙漠のごとく無味にして、鐵骨の檻の束縛にも似たらん汝が道德則より解放して、もつて、その圏外の淨地に删除し置かんことを……。

若かき認識論

若かき日にこそ戀愛はあれ、若かき日にこそ藝術はあれ、若かき日にこそ詩歌はあれ、若かき日にこそ哲學はあれ、若かき日にこそ希望はあれ、若かき日にこそ信仰はあれ、若かき日にこそ勇氣はあれ、若かき日にこそ生命はあれ。

天地萬物一切の存在のごときは、則ち、若かき日においてこそ初じめて意義ある一切の存在にして、官能觸目一切の現象認識のごときも、則ち、若かき日においてのみ始めて價值あるべきの一切の現象認識といふべけれ。

おゝそれ、人間全生涯のページより、われらが若かき日と、若かき年代とを除去したる、爾餘の餘生のごときは、則ち、認識の必要だになき残渣のみなれ、糟粕のみなれ、形骸のみなれ、無意義のみなれ、無價値のみなれ、而してまた、圓き形ちの生命の根基をば、細き形ちの牛涎のごとくに延

長せる存在のみにてあらんなれ。

おゝわれ、彼の魂ひなき口腹生活者のみじめなる亡靈を忌む、おゝ、而うしてまた、吾人のわかき日の光彩ある認識論の如きは、つねに、前上のごときの見地と判断の上より出發す、これをこれ人生必須の論議の歸結となす、亦た可ならずや。

若かき戀愛觀

おゝ友よ、われをして今ま少しく、わかき戀愛に對する觀念と態度とに就いて、述ぶるところあらしめよ。

おゝそれ、わかき吾が戀愛は驀進なり、女にして温順に、よくわが愛をうけ容れて頷づくとき、疾行われはたゞちに彼女の肩に寄り添ひて、忽ちそのうなづに接吻せせん。

おゝそれ、わかき吾が戀愛は恭敬なり、女にして高潔に、聖よき情思を裏みて優しきまなざしをば送るとき、われは倏ち彼女の前に感激して、裳そのほとりに跪かむ。

おゝそれ、わかき吾が戀愛は寛仁なり、女にして貞淑に、既に意中の人あるこゝを告曰して哀願す

るとき、われは乍ち彼女のために祝福して、阿郎の許にはなちやらん。

おゝそれ、わかき吾が戀愛は權力なり、女にして逡巡に、左顧右瞻心迷ひていつまでか決せざるとき、われは奄ち彼女の腕なをば引きつれ來りて、答との下に服従せしめむ。

おゝそれ、わかき吾が戀愛は突撃なり、女にして驕慢に、傲然高きうそぶきをなしてわが熱愛をば疎んずるとき、われは忽ち彼女の面上に唾きして、匕首たちどころにかれが胸をば剝ぐり去らん。

おゝ君よ、われはいまかくの如きの覺悟と勇氣とある戀愛觀をもつて、堅甲凜然たる戰陣の鐵騎のごとく、つねに昂々として、青春多血の生の間に濶歩せんと欲す。

第二門

(諷詠篇)

存在の危機

おゝそれ、生き存在せんとするものゝ危機！

一步、この足^{あし}脚退くとき、わが生存は危うし、

一旦、後ろを振向くとき、わが人世は淋^{しみ}びし、

一息、この呼吸静止するとき、わが生命は長へに虚^なし、

一敗、地に塗^ぬみるゝとき、わが生活は破綻百出すべし。

生きよ！ 生きよ！ 進め！ 進め！ さ、進軍喇叭のごとく、

踊どれ！ 踊どれ！ 遊べ！ 遊べ！ と、笛太鼓のごとく、

働^{はたら}け！ 働^{はたら}け！ 若^{わか}やげ！ 若^{わか}やげ！ と、巨人のうめきのごとく、

おゝおゝ、わが心臓はしきりに躍動す。

諷詠の姿

恬淡の滋味は、
われかつて、これを嘗めず。

無爲の境地は、
われいまだ、これを味はず。

野にありては、

清麗、

一輪の幽花。

空にありては、

翱翔、

一羽の飛鳥。

宇宙萬象の、至美なる映畫は、
すなはち、この間に展開されぬ。

落花……流水……、

あゝまた何ぞ、わが諷詠の姿に似たる……。

彼の子の曲

われいま、暫らくこれと呼ぶに、「彼の子」といふ。

43
彼の子の生るゝや、春の色、天地に漲ぎり、
彼の子の成育するや、美しき鳥、皆な轉つりぬ。

彼の子の姿態は、遙曳として、彩や雲の嶺巔を遠ぐるがごとく、
 彼の子の呼吸は、馥郁として、そよ風の殿上に薫ほるがごとし。
 その立つや、耀乎たり、その歩むや、皎乎たり。

彼の子一とたび、手を舉げて指示すところ、諸種の花は園に開き満ち、
 彼の子一またび、首べを回らして顧盼するまき、瑞祥の雲は野に靉鬱す。

彼の子は、あらゆる美の粹を採つて、その身を粧ざり、

しかうしてこの世に、人生至上の幸福として出現したり。

彼の子を思慕するものは、恍惚として、憧憬の念ひに驅り去られ、

彼の子と別るゝものは、哀々として、無情の涙にうち沈む。

而うして、またその、往くところ、還へるまき、

讚美の聲は潮ほと起りて、人をして怡然として歡樂せしむ。

あゝそれ、彼の子とは、果して何者ぞ！

あゝそれ、彼の子とは、果して何者ぞ！

彼の子は常に、莞笑と愉悅の中に遍在して、自ら名乗るまきを敢てなさないも、
 時ありて輿に乗するまきは、黄金の矢をもつて月桂樹の堅琴をか鳴らし、

朗々亮々、欣々焉として、獨りたのしみ歌ふ。

乞ふ、その歌の一曲を聴け！

珊々たる名玉は

愛すべし惜むべし

生々たる一代は

悦ぶべし樂むべし

青春長へに逝くときは

梢頭ふたゝび花咲かず

紅顔此身を去るときは

百鳥いたづらに悲韻を傳ふ。

おゝわれいまに於てよく遊ばなん

おゝわれいまに於てよく快しまなん

活動と歡喜とは

われの最も冀ふところ

人にして來り近づくときは

われ能くその子を引いて仙境に導かん

人にして來り親しむときは

われ能くその子の胸に血を湧かしめん

人よまたそれ目をあげて

わが領土の光景をながめよ

愛情の塗色に和ごめる碧瑠璃の空

希望の雄波濤波に灼やく曙の海

鬱蒼たるは久遠の森林

爛漫たるは不斷の花園

幸福の平野は廣くひらけて

滾々たる不滅の泉は涌きもて盡きず

團欒こぼちの樹立には無始無終の力満ち

潺緩たる生命の川は脈動の流れをなす

慰安の山々は遠く聳立ちて

永劫無限の春の光は活潑地として其間に更新す。

しかも此くのごときの

幾多の善美を聚つめて

光榮あまねき

わが身の本体こそは

おゝ……それ……まこと

『わかきタイムの精靈』にてありけるかな——。

契りにし少女

雲は出でたり、

岡の彼方に……………

蓬々として……近く……遠く……

低迷び……たなず舞臺き……美しく……麗はしきかな。

われは人の性情こころの、花の色香のごとくに移ろひやしきを惟たゞもふとき、
かの雲の、幽遠なる姿に對して、心おのづから哀想湧き來たらんとす、
而うして、又たつか、わが人生に對するの、悠久なる生命を懷ふ。

お……………

われは、一とたび契りにし少女の、

美しく、麗はしき、かの雲のごとくに、

わかくして、のどけき、永久とこの姿にあらんことをこそこひ希ふ。

春野の歡語

若かき子と愛らしき少女とは、今ま春の野にうちつ 立ちて相歡語る……………

花は山野に錦を織りなして、蟲蝶は演舞し、天は快々と晴れ、草木は青々欣々と伸張し、蜂群小
禽しきりに其間に飛びかひて、日光は天地に赫灼と照りはへたり。

少女は快々たる日光を、指さして曰く、

如何に日光の耀けるよ、彼れは日々に出で、日々に新たなり、日光や美なるかな。

若かき子頷きて、之れに答へて曰く、

しかも人間の部落や如何、瓦と壁とは日々に古びゆく、人間の生活や力なきかな。

少女はこの時、靜かにうちほゝゑみて曰く、

おゝさなり、この世に卿と妾なかりせば……………

美しき友

われは、名將の、友とはならず、
 われは、勇士の、味方とはならず、
 わが友は、美しき少女にして、
 わが味方は、美しき少年のみ。

失ひたる國は、求むべく、
 壞つれたる城は、築くべし、
 しかも一度び、わが手よりして、
 いまこの、少年と少女を奪ひ去るものありとせば、
 われまた之れを、いづれの處にか求むべき。

攻奪略取の業のごときは、
 すべからず、欲するものに任じて可なり、
 國と城とは、われにとりては、
 あまりに、貴重なるものにはあらざるべし。

われは唯だこの、少年少女等さうちつれて、
 ともにく、今日のひと日を遊ぼんことをのみこひねがふ、
 いざや、野の路に草をし摘まんか、
 深山がくれに、花をば折らんか、
 來れ！來れ！美しき友……！

二人の友

われに、二人の友ありき、

かれ等の一人は、醜くき子なりき、
 かれ等の一人は、愛せられざる子なりき、
 而うして一人は、世に謂ふ科學者となり
 一人に世に謂ふ、道學者となりぬ、

一日われは、かれ等と路に遇ひつ、

かれ等の一人は、われを泣く子に嘲けり、
 かれ等の一人は、われを弱き子に罵れり、
 われは腹立ちて、かれ等をかへりみぬ、
 而うして、醜くき子！愛せられざる子！と噬ひて走りぬ。

天才の人

山は熱烈として、火焰を吐き、
 水は奔騰として、巖を裂く、
 花は歴亂として、野に開らき、
 鳥は皆々として、空に啼く、
 地に歌ひ奏するときは、幽徑一啣の蟲の聲、
 天に飛び翔けるときは、萬壑層疊の雲の色。

熹微なるものは、星の影、

赫々たるは、日の光、

風は、叫喚か、

雨は、涕淚か、

小にして點々と宿れるものは、玲瓏たる葉末の露、
 大にして澎湃と漂ふものは、汪洋たる無涯の海。

かれ怒るとき、天地直ちに戰慄おのき、
 かれ哭なげぐとき、草木忽しち凋落しれ、
 かれ笑ふとき、生靈すな便たのはち歡樂たのむ、
 偉たなるかなや、自然の働作、
 美たなるかなや、自然の姿態、
 千變ち萬化まの、造化の極致、
 人にありては、果して何に譬たとへん乎。

曰いはく……………

彼の、天才の人を見よ！

少女の賦

汝は他日子を生きことあるがゆゑに、直ちにいま母たるの責務を負はざるべからずは、われ之れ

を信ずる能はず。

汝は他日人に嫁つぐことあるがゆゑに、直ちにいま妻たるの制裁を受けざるべからずは、われ之れに服する能はず。

汝の年齢は若草のごとく妙齡に、汝の姿態は三春の花のごとし、丹唇にきは朗あかに、明眸めいは善よく睐みへりて、鬢かみ輔ほは薔薇ばらの苔こけみの紅あかひにも似たりけり。

天はいま、汝に名命して汝を呼ぶに『少女』を以つてせり……………。

少女はたどうるはしく、たゞ愛らしかれ、少女の時代はうらわかくして爛々たる風情あるの外、そこに何等の責務なく、何等の制裁あることなけん。

おゝさなり、汝はいま伶人吹奏の樂の音の、舞堂のあなたに起るとき、たゞ彼の若かき子こ美うしき友の手をば執り、歩調もかろやかにうち出で、俱に、與に、春の調べのふし佳きにあぐがれあらば足らんのみ。

輝ける月

海の彼方に、女神のごとく輝ける月。
皎として朧たしや、そはわれ、かつて垣間見し女性の、花の夕暮、御簾深かきあたりに、玉のかんばせ、いともほのかに佇めるさまにも似たりけり。

なつかしい哉、月の姿や。

或るものは慈母のふところの、あたゝかき夢のかけ橋をも懐ふべく また、或るものはなつかしきはらからの、やさし心のたまゝの訪づれをも想ふべし。

月の光の、標^し示すところ、

熱情乎、慰藉乎 諷刺乎、冷笑乎、夜色は―幽暗に……海波は―縹渺と……空虚にして、しかも充實なるものは、かの月の姿にやあらんかし。

熱情、諷刺と、慰藉と、冷笑と。

かくの如きは、われに於いて、いま敢て深く問ふところにはあらず、鬼まれ、われをしていまわ

が望むところを乞はしめよ、而うして、夜を排し、海を涉りて、われをしてたゞ、かの輝ける月の光りに行かしめよ。

行路の人

人や生るゝ、何の因 何の縁、

生れては、いづくに急ぐ、旅なるぞも、

人生五十、遅乎、速乎、

うたかたの世なりきは、誰がいひけん。

野に草蒼くしきのべて、里にさく花こまやかなるも、

畢竟は行李擔頭の、雲霧として過ぐべくや、

さばれ、その雲霧よ、何すれぞ夫れ愁ひ多き。

先人、いひけらく、

清角一聲月落ちんと欲し、

落ちんと欲して落ちずして低く枝に懸る、

残影は花に迷ふて又た柳に迷ふ——と。

言を寄す、

行路の人、

似たるはこの世、人の身ならずやも……。

星と波

燦としてみ空にかがやく星の光りは、彼女の明眸か——靨として岸うつ波の音は、わが胸の鼓動なれ。

かの星や高く、

この波や劇しきかな。

都會の子

都ぞ春の錦なりけり、希望と、美味と、歡樂と、自由に、いとよく充ち盈ちたるは、けに都會なれ。

人は果の酸きをのみ嗜むものは、花は匂ひ佳きぞめでたけれ、望むらくは、一たびわれをして

花より花に戯る、胡蝶のごとく、翩跹翳々として身も心も軽ろやかなる、瀟洒の姿態の、かの都會の子たらしめよ。

今夕の睡眠

日はいま午を過ぎたり、空は薄衣の奥にかく碧潭の色を湛たへ、春光煦々として和暖を温醸し、驛路人閑かに、鶉犬は睡り、艸色青々として梅櫻桃李山野に歴亂たり、しかも、清流の聲滑らかなる。こころ、沃土地味豊たかに、桃源の夢は圓どかにして、三春の行樂いま最も恣まにすべし。

往還の一路に沿ふて一旗亭あり、旗亭は一丘の麓にあり、酒を賣り、且つ、珍菓を鬻ぐ、一丘一林を負ひ、新緑參差として山花に映發す、而うして、旗亭の小旗は翩翩として輕風にうち旋びき、行人絡繹として頻りにその前を過ぎゆけり。

旗亭の店頭、妙齡の少婦あり、立つて客を見る、明眸にして皓齒、嬌面にして豊頬、一世の國色に値ひすべし、今まし、遑々乎として店頭を過ぎ去らんとする一行人の袖を牽き、慇懃にひきたび之れに詰りて曰く、

おゝ、旅人よ、卿はそもいま何處くにか行かんとするや——と。

行人足を停め、振りかへりて之れに答へて曰く、

吾れは、次ぎなる驛に到らんと欲す——と。

少婦婉然、又た之れに詰りて曰く、

次ぎなる驛さや……次ぎなる驛には、如何なる佳人かおはして卿を待つや、而して旅人は、何物を得んと欲してか、しかく齷齪として急行するや——と。

行人逡巡、訝りて答へて曰く、

次ぎの驛には……何人も吾れを待つことなし、且つまた……吾れは何物も得んとするところなし、人わが前に行く、吾れ又た之れに行かざるべからず、次ぎなる驛には、たゞそれ今夕の睡眠あるのみ——と。

少婦こゝに於てか、嬌面を傾けて曰く、

おゝ、唯だ、今夕の睡眠乎、しからは、妾は問はんぞ欲す、只だその今夕の睡眠にゆかんとするに、急行と徐歩と、其處に幾何の逕庭ある——と。

行人一考、稽首して答へて曰く、

吾れにおいていま、知るところなし——と。

少婦歩を前め、堅くその行人の手を執りて止めて曰く、

愛すべき旅人よ、妾は卿に告げまく欲す、日に多く、日々に新たに、遠來の客、匆々として妾が店頭を過ぎゆく、しかうして、彼れ等の目は一樣に、前程の行路の險難と遠遠とを覬視するのみにして、たえて、妾が家の牀几を顧眄するものなし、妾は怪しみぬ、彼れ等は果してその前途に、如何なる物を望み、如何なる人をば求むるにやと、而うしていま卿に就いてこれを質せば、則ち今夕の睡眠あるのみと、あゝたゞそれ今夕の睡眠にゆく、何の必要なりてか行途の急行を敢てす

べけんや、乞ふ、今夕の睡眠のごときは妾が家の翠帳紅閨の中にも猶ほこれあり、傍牆の桃李と
 窓前の春暖は、能くその卿のまどかなる濃夢を守りて餘りあるべし、加ふるに、不肖妾の卿に慰
 懃侍坐するにおいてをや——と。

この時、行人破顔手を拍つて嘆じて曰く、

然り然り、まことに之れあるかな、今まにして吾れ初めてこれを知る、吾人の行旅は、由來空々
 茫々として何等の際涯なく、歸するところは、日々驛路に次ぐに驛路を以つてし、驛亭又た驛亭
 連々綿々として行けども、終生、最後の安着と休憩あるなし、既に最後の安着と休憩あること
 なくんば、隨て又た、われ等の到達すべき窮極も最後の驛亭もあることなからん、おゝ然り、今
 まにして之れを知る、胡爲れぞ夫れ、かくのごとくに對して、われ等はまたそれ追忙として急行
 疾驅せざるべからざるの必要あらめや、茫々の行旅を辿つて遠行するものゝ生命に取り、尊ぶべ
 きところはいま、急行にあらず、疾驅にあらず、最も適度の休息を贏ち得べき、快よき今夕の睡
 眠のみなれ、而うしてその今夕の睡眠たるや、徐行するもこれを得べく、且つ又た、汝の家の中
 にも之れを求むべし、しかも、われ等の睡眠が、終極いづれの驛亭において結末を遂げらるべき
 ものなるかを揣かり知る能はざるこの身に在りては、今夕の睡眠を汝が家に寄托して、もつて興あ

る融々の歡情をつくすも、亦たそれ人生得難きの快事ならずとせず、春眠曉を覺えざる醉夢の境地
 のごきも、時に又た、行旅の間に生ずる一場の價值談柄たるものなからざらんや、請ふ、願はく
 は吾れをして、今夕汝が家の暖房の傍らに、のびくとして憩ふごきを安らかならしめよ——と。

あゝ、あゝ、かれ等は、かくのごきにして互に情意投合し、相祝し、相悦こび、固く相抱擁して
 少婦の家に入り、喃喃々々、過去を語り、將來を慰め、もつて意味ある人世の生涯をば拓かんご努
 むらし。

おゝ、おゝ、一夕の歡宴、かれ等をしてすべからく過去現在生の辛勞をば一掃せしめよ、又たもつ
 てかれ等が上に、死して悔ひなきの永世の幸福あらしめよ、しかもこの世に於いて良く生きんとす
 るものは、良く生きんとする所以の道をば、いまそれ茲に良く擇べかしき、吾人は爾か獎め、復た敢
 て、爾か云ふ。

疑問の中

春の夜の月の、
おほろなる、

曉方の山の、
うす霏せる、

海ゆく舟の、
島かけとなる、

處女の羞ぢて、
物いはざる、

森羅萬象……………

神秘の雲にかくろひてこそ、ともに風情あれ。

山 と 海

われ山に登れり。

鳥は高く飛んで、雲霧は四散す、
手を翳して八方を展望するに、
人間の部落の、いと小さくも見ゆ。

われ海に行けり。

風強く吹すさみて、波濤岸を嘯む、

飛沫を浴びて巖角に据すれば、

わが心、遠く人間の生活をば離れ去る。

波 上 行

唯だ看る、湖面森々二鏡のごとく、水色遠く漫々と湛へて、宛かもまた桶中の藍に似たり、而うして黠々たる島嶼の間、舟はいま揺々として波の上をゆきつゝあり……………。

風は飄冷として吹き流れて、衣髪ために適快に、水禽高く揚り飛ぶとき、その聲や幽かなり、しかうして又た、空と水との相連なるところには、雲と煙りと、その果てに生じ罩めたり。

舟には、われとわが友さありき、友とわれとは相對していま一語を發すなるし、無言はわれ等に何を教ふるや——この時友は空の高きを仰ぎ見て、その眼は憧憬に耀きぬ、うつくしき横顔や、われは水の深きに思ひ入りて、心は思慕に醉へるがごこし。

ゆきゆきて、ゆきゆけば、風いよゝゝ輕ろやかに、舟は水光をうち碎いて櫂の音いさ妙へなり、あれこれ、果して何等の境地ぞ、神は恍惚として、それいづくにか適き歸せんとす。

おゝ君よ、暢神といひ、感激といふ、共にそれみな突差の興來ならずや、われ等はかくのごときの境地に入りたらんとき、寸毫死すとも悔ひざらんなれ……………。

五 彩 の 雲

空の彼方、目も遙るに、

五彩の雲、舞臺として流れゆく、

高く、遠く、淡く、幽に、
そのさま、げにや、畫にも似たるかな。

黒や、赤や、紫や、黄や、白や、

そはそも、何物の對象を、表現する色彩ぞ、

かなし、われはいま、

やがては、一たび、別るべき彼の子の、

かの雲に乗りて去るにはあらざるやを——想ふ。

されど………われかなしませ、

若かき子の、愁ひ哀なしむは、

われの斷じて贅せざるところ、

彼の子も、會つて、われとは、

ほゝゑむことと、たのしむことのみを——語りたり。

おゝ、さなり、

われはいま、彼の子について念はずして、

たゞ、かの雲のたゞすまひを觀て、愉しとせん、

笛は、腰にあり………。

こ の 花

離れがたなの君が籬根、

折りとりしはこれこの花、

花はわれをば恨みずも、わが得んとするところは花にあらず。

夜な／＼きたりて君が籬根、

折りとりしはこれこの花、

花はわれをば恨みずも、おゝわが得んとするところは花にあらず。

逝く春

春、逝かんとす、

あゝ、春、逝かんとす、

春、逝かんとして、わが心しきりに哀なしきかな、

而うして、われはいま凋悵として、ひとり暮靄の中に立てり。

おふ君よ、われは今まかの白壁の面をば鑄つて、試みに春を送るの辭を題せん乎。

おゝ見よ 世に暗き影あれど長へなる姿なし

おゝ春よ 春は虹の如く立ちて彼の空に消ゆ

おゝ人よ 人は老い朽ち去りて地の下にゆく

途上の頑石

途上の頑石、これを摩擦するときは、則ち熱を生じ、なほよくこれを打つときは、火を發せん。

頑石業すでにしかり、矧んや人をや、おゝ君よ、居常靜平なる人をもつて、唯だそれ靜平なる人とのみ惟もふこゝ勿かれ、熱血劍を執つて起つの勇氣と、熱烈人を灼き盡すべきの情火の、豈にかれが深奥なる胸底に蟠まるならんや、おゝ夫れ、人もし途上の頑石に向つて、汝は平素何故に靜平なるや——と問ふことあらば、頑石莞爾として、次ぎのごとくも答へん乎。

機を見て憤然、時を得て憂然、而うして、不用意にして血のめぐり鈍ぶき、汝が驚く顔をつくらんがために……と。

星の光

父や戀ひしき、母やいとしき、わが魂ひの夢みる國やいつこ、空を望めば、雲際涯なく、地平線上
遼遠にして、烟霞漠々と閉ぢこめぬ。

わが心、いまし頻りに彼の女をば追慕して、獨り一條の路をゆく………暮色は暗怛として草木に迫まり、而うして、その行くや、歩み遅々たり。

この時、何等の慈光ぞ、空の彼方に、白き星一つ煌やきいでぬ、而うして、わが心を吸引しぬ、われを凝然として、暫らくはその星のさまをば睥視しぬ。

おゝ、星の光よ、おゝ、わがあくがれごころよ、われはこのとき突差に、彼の女に行くの心をもつて迺はちかの空の星の光にゆかんことを欲せり、而うして、われみづから、その何故に然るをば知らざるなり。

黄金の美酒

月卿雲客の種屬のごときは、敢て、吾人の望みとはなさざるべし、王侯貴族の階級のごときは、敢て、吾人の願ひとはなさざるべし。

一場の歡樂、もつて今日の一駒をば送るの後、われは黄金の美酒を傾けて、蓬來の曲を詠ひ、飄然獨りかの華唇の國に遊ばんことを切におもふ。

杯中の酒

世路艱難にして、渉るべからず、

世情陰慘にして、反覆常ねなし、

たゞ、杯中の酒のみありて、

われをして、陶然として酔倒せしむ。

おゝ、眞にわが心を知るものは、杯中の酒乎。

酔中の君

過去は悠遠にして、たづ温ぬべからず、

未來は漢焉として、思へさも詮なし、
たゞ、酔中の君のみありて、

われをして哄然として大笑せしむ。

あゝ、眞にわが心を得るものは、酔中の君乎。

花の驕態

梅花馥郁、棠花嬋々、梨花の淡泊、櫻花の絢爛、三春の姿色、それ、俱に共に佳し。

さはれ、いまその性と年代とをもつて花を見る、若かき心のふくよかなるまゝ、われは寧ろかの牡丹の驕態をば採らんかな。

罪 悪

若かき子、花を折りて走らんとする時、或る人、路にこれを詰責めたり。

若かき子、目を張りて答へて曰く、花を折るは罪惡なりや、われは之れをしらざりしなり——と。

高 き 姿

雲一片、海をわたりて、去る……

高かき姿こそ、ありてほりする……

悠久の天地

生るべきものをして、

生れしめよ、

死すべきものをして、

死せしめよ。

天地悠々、
すなはち、

かの無窮とともに、
在らんのみ。

會心の友

詩卷を枕して、終夜、かの女の姿を思慕するとき、筆を投じて、半日白雲を觀るのとき。
會心の友は、われに對してまづほく笑む。

花蔭の夢

さしくる春のあたゝかき日影をば、天然の褥ねの若草の上にうけ敷きて、われは今ま咲きほこる櫻
の花蔭うまゝに熟睡せり。

風や梢を吹きわたる、花片は霏々と飛んで、わが顔を埋つめ、わが胸のあたりをば蔽ひかくさんとす。

このとき、突如として、われは何者かの問答をば耳にせり、而うして、その打涸ほれて力なき第一の聲は、うめくがごとく、いと痛切に叫びて曰く、

おゝ君よ、吾れはしも、未だ會つて君に對して、負むきたることもなく、過まてることもなし、
吾れは君に對して、犯したる罪もなく、悪まるゝ非違もなし、しかもなほ、君は慘酷にも、この
可憐なる吾れの、世にたぐひなき、いともいみじき、青春の花の生命をばいま、奪ひ去らんとす
るにや——こ。

之れに對して第二の聲は 暫時低回去るに忍びざるものゝごとく、やがて、いと深沈に、いと哀々と答へて曰はく、

汝よ、誤解するなかれ、我れはたゞ、水のごとくに、波のごとくに、靜かに、いこ靜かに、去らざるべからず、我れは汝より去るにあたりて寸毫、思ひ邪よこしましなまし、我れは唯だかの天の命に従ふ、時去り時來れば、我れはたゞ汝より去らざるべからず……………と。

第一の聲は更に、感亂せる悲痛の聲をあげて叫ぶ、

おゝ、君は吾れをば棄て去らんとするや、おゝ、可憐なる吾れをば……………吾れはいかにすべき……………棄つるなかれ、願はくは棄つるなかれ、吾れは今ま君に對して、如何なる犠牲をも、惜しまずとこそ惟もふ、よからずや、せめて、いま暫時……………。

其の聲や。あはれのきわみにて、いと悲しかりき。

否、否、否、我れはたゞ、容赦なく去らざるべからず……………天の彼方に……………おゝ日は暮れんとす……………さらば……………よ……………。

其の聲や、決然として、しかも情けこめて、いとく嚴かなりき。

われは目醒めたり、空には日影傾きてありき、わが胸は不思議にも、重もきおもひに襲はれありぬ。

おゝ、そは他事とのみは思はれざり、花蔭の夢は、げに、われ等が青春この訣別の悲劇の、豫感と暗示との、一場面にてこそあらざりしやも……………。

第三門

(辯難篇)

人間讃頌辭

萬卷の書を讀破するにあらざれば、學者となること能はずんば、われは學者となることをば欲せざるべし。

難行苦行の修業を経るにあらざれば、名僧智識となること能はずんば、われは名僧智識となることをば欲せざるべし。

粒々辛酸の勞苦を^{かさ}層ぬるにあらざれば、陶朱倚頓の富力を積む能はずんば、われは富豪の徒となることをば欲せざるべし。

憂心慘々の計策術數を用ゆるにあらざれば、軍將たり爲政家たること能はずんば、われは軍將爲政家となることをば欲せざるべし。

これ等はげにその準備のために、貴重なる若かき日のタイムの多くと、須要なる活力の原氣をば無用に消耗すべく、且つ又た甚大なる心血の犠牲と、尊貴なる腦力の損失をば來たすべければなり。

おゝ、われはしも、人間こそよけれ、作爲なき人間こそよけれ、人間の人間らしきものこそよけれ

飾りなく、偽りなく、阿りなく、遜りなき、そのままなる人間の人間らしきものこそよけれ。
 おも、われはしも今まこゝに、彼れが、穉氣、露骨、天真、獨我、無邪、欣抔、跳躍、の諸徳をば
 ほめ讃へなん。

おも、われは、生れながらにして、成育したるまゝにして、たゞくありのまゝなる人間そのもの
 として存在せんこゝをこそこひねがふ。

これを之れ、いさゝか吾人が、人間讃頌の辭ばとなさんとす。

人間の傳記

閱歷を問ふなかれ、教育を問ふなかれ。

蓬然、又た、吹然、風のごとくにして來り、風のごまきにして去るものは、夫れ、人間の傳記とな
 すべし、人にして儻しこの言を可ませずば、乞ふ、願はくは採つてわれみづからの傳記と呼ばん。
 しかうしてわれいま謂はんとす、人にして戚々たらずば、粗食水飲の貧に處るも、何の慙づるとこ
 ろかあるものならんや、人にして汲々たらずば富貴權門の榮に行くも、亦た何の不可とするところ
 か之、あるべき、出で、汲々たらず、入りて戚々たらず、貧居と富貴とは蓬然たり吹然たる吾人の

傳記において、また毫厘の煩累ひなけん。

要は當面の彼れに看よ、當面に活躍する彼れが面目の如何に見よ、而うしてその風のごまき傳記の
 中、當面に發現したる彼れが人格を彼れが才能をして、不問不答の間に、彼れみづからの閱歷と彼
 れみづからの教育の尊貴をば語らしめよ。

悟脱の辯

おも、人よ、北國における雪の景色と、南國における花の季節とは、ともに之れ寒暖兩帯を奄有する
 渾圓球上の美觀にあらずや、彼れに冷暑法を施し、此れに溫療法を行ひ、患者醫療の適否を料るは
 これまた國手術中の秘訣となせり。

故にわれいま、世の悟脱を説くものゝ前に立ちて、一言平素の懷抱をば述べんとす。

汝はそれ、よく冷靜にしてよく透明なり、われはそれ、よく活動してよく熱中す、しかれどもかく
 のごまきの單一なる理由をもつて、即ち汝は悟脱せりとみづから誇耀せんとするがごときことあ
 らば、われ復た敢て自己擅場の行爲をもつて、みづから之れを迷ふものと謙讓すべけんや、靜思や
 活動や、冷頭や、熱血や、此の間、汝は果して幾何消長と幾何差異の甲乙をば割せんとするや。

おゝ人よ、敢て汝に告げん、甘味と鹹味とは、共にこれ食味調理の必需品にして、氷室に貯蔵する冷肉と、火上に焼灼する炙肉とは、同じくまた、日夕食膳需要に對する、料理盤上の供給にこそあらめかし。

けに夫れ、吾人眞個の悟脱のごときは、いづれの道を選ぶに關せず、徹底不動—冷熱一如—の淨妙境の中にこそあらめ、枯木寒林の小窟にのみ端坐することを能事として、空づらに暖氣おもむろにその面を横ぎるを嘲けるごときは、賢の賢なる所以にあらず、寧ろかの智の拮据をば擲棄して、如何んぞそれ、歡情融々、百花葩咲く園の、わが微笑門の眞諦には歸依し來らざる。

高慢人

物として學ぶものは、必ずや學ばるべし、人にして學ばざりしは、學ばれざりしのみ、しかも、汝は何故に學ばざりしやと詰むるがごときは、畢竟、人に向つて、汝は何故にわが母より生れざりしやと問ふに等しとなす。

學ぶことを得ずして、なほ且つ、その少しくをも學び得たる好學の士に對しては、われこれを重んずべし、學ぶごきを得て、而うして、その多くをば學び得たるを浮誇するかの術學輩のごときに對

しては、唾棄して先づその彼れ等が高慢をば退けんご欲す。

おゝそれ、學修の例に於ける既にしかりとなす、況んや感激の境地をや、大悟といひ、神性といひ身みづからのみ高く矜持して、いはれなく一世の人を低しと傲嘯するもの、雨滴と—大湖と—共にそれ酸素と水素の化合物たる事のごわりをば知れよかし。

山頭の風月

われに求むるところなくば、王侯といへども、遜るなし、怖るゝなし、われに關するところなくば紛糾すこいへども、焦慮するなし、煩悶するなし。

學問の道、また然りとなす、われに多く識り多く語らんとするの術氣なければ、百千學者の禿頭を臚列するも、復た何んぞ羨まん、琴書悠游の境地のごときは、離齷輩の容易に覗知し能はざるところ、その心つねに超然たるを得るものは、その行藏亦たつねに事外に逍遙することを得べし。

おゝそれ然かり、故にわれまたこゝに因なみに曰はんとす、人わが言説の門に對峙し、詳議細論、是非反駁の言をなすことありとも、われいま敢て之れと能く諍はんや、わが感激這箇の眞意義のごときは、わが心境に醸成せられたる、われみづからの觀照世界に於いてこそ、初めて味到諒解せら

るべきの性質と便方とを有するものにして、豈にかの詳議細論輩の、素りに侵入掠奪的に理解し得べきの妙境ならんや。

お、唯だ、わが口多くこれを辯ぜず、須らく山頭明媚の風月を指さして、顧みて君も他を談ぜんかな。

終極の抱負

人をもつて小なるものとなす、われ之れを取らず、人をもつて大なるものとなす、われ之れを知らざるなり。

さはれ、海にして大なるときは、能く受け容れて百川を呑み、雨にして大なるときは、能く發し散じて八方に濺ぐ、大象や大牛や、千萬貫を負ふて復たそれ千里の遠きに往かなむ。

人よやよ、世にありとしてあらゆるもの、大にして用を爲すときは、量に於いても亦た實にその多くを辯ずるを得べからめ、故にわれ今ま謂はんは、人はすべからく先づそれ大ならんことを試みよと、試みて達する能はざれば初めて自己の力を自覺す、戦はずして氣先づその前に降だるがときは、われに於いて甚だその怯なるを如何すべきぞ。

夫れ然り、人はいたづらに自ら小なるものとして怯なるをゆるさず、われはすべからく自ら大なるものとして任ぜざるべからず、しかも人あり、われに向つて、汝が終極の抱負奈何と問ふものあらば、われは些少の遲疑をも要することなくして、次ぎのごとくも答へんと欲す。

驕りの死にあらざれば、匍匐して汝が膝下にゆかん——と。

偶然の存在

お、君よ、誰れかわが世の存在をもつて、偶然事ならずといふや。

天地創成より、萬有終結の極所に達す、其間、何億何千何百何十萬年、誰れかその初めを見しや、誰れか又その畢りを看るや、生物生じて渾圓循環、誰れか能くその出處發生を知り、誰れかまた能くその結末終焉を識り得るや、實在といひ、顯證といひ、經驗といふも、推定の論理の敷衍にそれ幾何の權威やあらめ、詮するところは、人間小智の摸索作用に出發する認識上の自己僞瞞に外ならざるなれ。

吾人をしていまこゝに、忌憚なく、根柢的、決定的、に大語せしめば、人間の有する總べての學問技術によつて支配せらるゝ、萬有現象界に對する吾人の既成觀念のごときは、歸納するところ畢竟

まことしやかなる臆懼假象の辯證説明に外ならず、深刻精博、いかに理論の本髓を究めたりと稱するとも、一決、千古を折だめ、一掛、盡未來を斷すべきの權能果してかれにあるものならんや、お、視よ、足一步、わが提唱の微笑門を出づるとき、累々として道途に横はる死相の形骸は乃はち何ぞ懷疑のみ、陰濕のみ、厭世のみ、絶望のみ、暗黒のみ、空虚のみ……ならずや。

お、それ君よ、誰れかわが世の存在をもつて、偶然事ならずといふや。

乞ふ、吾人をしていま徒らに冗長無用の言を弄することを爲さしめざれ、吾人はこゝにその廣き範圍の事例に亘りて、一々仔細に論ずることを好まず、假りに須要なる一例を引いて、最も端的に、最も直截に、最も簡短に辯ずるとせんに、吾人一切の中心たり、焦點たり、目標たるところの、わが生の存在そのものにおいてすら、已でに、こし方原ぬべからず、ゆく末揣かるべからずして、探究臆測兩つながら茫乎として歸するところを知らざるの現状に於いては、たとへその事々物々の、出發終焉到着等に對して縦論横論すといへども、その歸結するところや推して知るべきにあらずや、不可解は夫れ眞理なれ、由來この問題に對して、確然不拔の決裁を與へたるもの果して何人乎ある、吾人はこの場合、しかもこれを以つて則ちわが世をば偶然の存在となす、亦た可なりとも思惟すべ

し、お、其れその理において何んの不可とするところかあるものならんや。

お、しかり、吾人今日現在に於ける開眼の存在のごときこそは、げにそれ偶然の存在ならめ、而して又た、千載一遇の享受たり逢遇たりとも謂つべく、やがてその他の一切のものの存在のごときに至りても、いづれかまたそれ偶然の存在にてはあらざるべき、お、然かり然かり、吾人今日一切の存在は偶然なり、天地萬物一切の存在は偶然なり、人の生るゝや偶然、人の死にゆくや偶然、宇宙渾圓萬感觸目の一切の事象は、凡べて成な之れ、偶然の存在にてはあらざるなし。

お、人よ、吾人は今ま如上の理義を表明するに當り、文を行ふに際して、敢てしばらくこの偶然の語を用ゐんとす、人若しこの語の字義に對して承服せず、語弊ありとして、不可なりとして、これに抗議するあらば、吾人は的確なる語彙の是正するところに従つて、幾度も改訂することを辭せざるべし、言辭は末なり、要は吾人言裏の本意にあり、立論根底の眞意義にあり、かの當然といひ必然といふとも、茫々不可解なることは依然として茫々不可解なるべくして、われにおいては一ありて二あること之れなきなり。

其他、辯辭言語の選擇の如きは、甲といひ乙といひ凹といひ凸といひて、幾多行使の形式方法ある

べしと雖も、直指敢言、歸するところは論究結局の道破にこそあなれ、目前現状の断定にこそあなれ、而うして又吾人存在の由來に對する的確なる如實の解釋にこそあなれ、萬象の存在認識に對する不拔なる解決にこそあなれ、儼し夫れそれ等の釋明結論にして、空しく吾人の首肯に値ひせずんば、言辭の上においてのみ必然なりとなし偶然ならずといふと雖も、目的とするところに用途をなさずして、何の效果かこれあるべき。

お、君よ、繞々として素りにむづかしきことのみを謂ふこと莫かれ、誰れかわが世の存在をもつて、偶然事ならずいふや、人の生るゝや偶然、人の死にゆくや偶然、偶然に開眼し、偶然に到達して、偶然に得たる今日の存在、あゝそれ吾人にとりては最も高價にして最も樂しからずや。

今日の安神

生物新々、偶然に生れ來りて、偶然に滅びゆく、しかも、偶然に存在して、偶然に得たる今日の天は、われにおいて最も樂しとするところ、而して、今日の安神は今日にあり、何ぞ殊更に覺悟してこの世を白眼に送るべけんや、又た何ぞ杯を舉げて、今日の天をば祝ぎ讚へざらんや。

お、生るるや偶然死にゆくや偶然、偶然に存在して、偶然に得たる今日の安神、われにおいて、

無二なるかな、尊ぶべきかな。

矛盾と人間

矛盾こそ、人間の思想にはあらざらめや、矛盾こそ、人間の行爲にはあらざらめや、矛盾こそ、人間の全人格にはあらざらめや、矛盾こそ人間の繁榮にはあらざらめや、矛盾こそ、人間の健闘努力にはあらざらめや、矛盾こそ人間の發達成長にはあらざらめや。

而うして、矛盾こそ、吾人人類に於ける社會的生活の美觀にして、生命助長の原則にてもあり、更に又た大なる宇宙法則の根柢にはあらざるべき乎。

人よそれ、吾人の所説と、行動と、思想上の矛盾をば咎がむる勿かれ、人にして業すでに有限の生をば附與せられ、短かき花の命の榮華こそ存在の意義なるべきこの世に於いては、時に、繁殖と、建設と、發展とを伴ふ幾多の矛盾をば包容括束して、もつて人類交互の生存的美觀を發揮し、且つ又た、宇宙の深大無限なる大法則に合しゆき殉じゆきて惑はざる、矛盾の人間の言議行爲の偉大力をも忘るべきにあらず。

吾人は寧ろ、矛盾の人間の讚美者となる、亦た時に辭せざるなり。

差別の存在

海には海の秀美あり、陸には陸の妙趣あり、海と陸と相連るがゆへに、陸地は必ずや海水より生じたりとはいふを得ざるべし。

神には神の力能あり、人には人の特技あり、神と人と相近きがゆへに、人は必ずしも神の子なりとはいふを得ざるべし。

梅には梅の芬香あり、桃には桃の艶色あり、桃と梅と相似たるがゆへに、桃の果は必ずや梅の枝に結ぶべしとはいふを得ざるべし。

汝には汝の推斷法あり、吾れには吾れの感激境あり、吾れと汝とその思案するところ相類するあるも、吾れは必ずしも汝の摹倣者なりとはいふことを得ざるべし。

彼れには彼れの生物論あり、吾れには吾れの人間觀あり、彼れと吾れと、その看るまゝところ相密接するも、吾れば必ずしも彼れらの雷同者たりとはいふことを得ざるべし。

さなり、さなり、一元といひ二元といふとも、いづれも之れ、古哲學者の囁語に過ぎずして、現在の生活に即するものゝ眼より觀るまきは、深かく、詮議すべきの要を見ず。

相偕に論じて嘯き、相與に沈思して自得するところあるとも、萬物全て各個々性に出發するものは畢竟各個々性に歸着して、要するところ、彼れは彼たり、吾れは吾れたり、汝はまた汝たるものに過ぎざるべし。

人類新々、思潮渙々、同工續出し、多様の類型簇々として生ずるあるも、甲乙丙丁いづれも個々生命の燃燒にあらざるはなく、しかも又た、彼れと汝と吾れとの間には、嚴密にして同じ難たき、劃然たる差別の存在こそあらんなれ。

言説の眞意

吾人はいま物いはんとす、言説の眞意そもく、那邊にかあるべき。

吾人は南畝に營々徒死する勞苦の人々を見て、ひこたびは歎けきぬ、かれ等は終生ごつくととして勤勵すれども、何の稱譽か得るところある——と。

吾人は村巷僻濱に生計して考廢しゆく年少男女の群れを看て、ひとたびは泣きぬ、かれ等は天真に

して戀々相愛する日あるも、誰れか能くその正當の認識をもつてかれが行爲の本質に價值づくるものぞいと。

吾人は今ま、幸不幸の按排均分ならざる現社會の生活組織上に生息する多くの人々に告ぐ。

乞ふらくは、人間人爲的の稱譽と、人間人爲的の價值關係のごときは、斷じてすべからく不問に附せよ、而うしてたゞ、泣け、笑へ、怒れ、喜べ、愁へよ、而うして又た、力の限り、最も痛切に、最も大膽に、最も赤裸々に、飾らず、僞らず、すべての機會に、すべての方面に、自己を發揚し、自己を擴充して、然かるのち歡然として顧慮するところなくこの世を逝き終へよ。

しからばたとへ、その名を青史に録するの稱譽なくとも、又たとへ、その身を一代に耀やかす底の榮達をかち得ざるも、自己の放情を盡し、自己の伸張を敢行して伴はるなくんば、埋死するこも憾みなく耻づるなからん、稱譽を得るも稱譽を得ざるも、價值を附せらるゝも價值を附せられざるも、吾人の自由の存在にとりては、毫末の累ひなく増減あることなし、自己の天與の美祿は、すなはち自己みづからこそ之れを享けなんす。

おゝさなり、吾人に於て、高貴無二なるわが一生涯のごときは、則ち自己みづからをして強調的意義あらしめよ、たとへ世の小廉曲謹のやからより、蛇蝎の如とくに稱譽の外道をもつて目せられ且つ又た、價值標準の轉倒者叛逆者をもつて誹謗せらるゝことあるとも、羈束なく天地大道の間に横行して、眞我獨往、悔ひざる懊めざるの心的境地に到達するがごときも、吾人の本懐として、愉のしとも亦た快のしからずやと斯く思惟す。

詠懷の資

あるべきものをして、この世に、あるがまゝにあらしめよ。

人生缺陷矛盾あらば、われは缺陷矛盾そのものを、そのまゝにして受け容れんことを欲すべし、人生衝突葛藤あらば、われは衝突葛藤そのものを、そのまゝにして嘗味せんことを欲するなり。

おゝそれ、匡すものは乃ち匡さるべし、世にありありとしてあらゆるもの、匡さんとして匡されざるもの果して幾何乎あるべきや、われは缺陷、矛盾、衝突、葛藤、それらのものに對して、毫厘の疑念なく、介意なし。

青山白水、天地おのづから、わが詠懷の資とならんことを望むのみ。

自然の流露

駘蕩の春光、來りて花におとづるゝとき、花はついに開かざるべからず、天機一たび閃めきて、人の心胸に觸るゝとき、人はたゞちに詠嘯の懐ひを發せん。
わかきその日の怡しさよ、人を愛し、人に愛せられて、青春一代の情思を暢ぶる、それ復た天意の促すところ、これを是れ自然の流露となす、亦た可ならん乎。

人間の條規

星辰天をいろどりて、露華地に布き、柳みどりにして、花くれなひなるは、これおのづからなる天地の色なり。

人にありては、たゞ之れを天真といふ、なにすれぞそれ、閑踏たる人間世界の條規に須つものならんや。

おゝ、われはかの、徒らに人間の條規をばみづから作り成して、おのづからなる自己の天真をば害はんとする、斗屑蚊虻のともがらを悪まんな。

天與の資格者

妖艶纏綿の情事のごときは、お夏清十郎物語をして談らしめよ、痛烈熱火の愛戀のごときは、彼のサツボ一の悲曲をして説かしめよ。

愛戀情事の眞意義は、愛戀情事の資格者たる性美の所有者好男好女にして始めて解すべく、くしく美しき思想哲理の要諦のごときも、くしく美しき性格の子を嫁つて初めてその眞處に到達するを得べけんなり、これすなはち彼れ等が天與の特權なるのみ。

おゝ、摸擬の醜草生ひ蔓りて、佳草の蔭より醜汚を行はんとするがごときはわれ斷じて之れを排す、おかめひよつとこ、みだりに愛戀情事を語るべけんや、溷濁汚穢の思想の所有者、また嚴然としてわが説述の門に近づくを許さずと知れ。

言外の辯

おゝ、かの大世界を觀よ、星辰羅織の間、森羅萬象を覆載して、黙々として廻轉するこゝの何ぞ深大なる！。

おゝ、かの眞骨頭を視よ、世路錯雜の間、詠嘯に託する人の、突々として面目と本領を發現せんとする態の何ぞ勇壯なる！。

おゝ、學ばんかな、われかの大世界を、群小相譏刺訾訾し、相喧囂するも、ついにまたこの大丈夫底の眞骨頭を奈何すべきぞ。

おゝ、人わが志を知るや否なや、われいま胸中の鬱勃を述べんを欲して、言短かく、意長し、しかれども亦た、言外意味ありておのづから辯をなすものあるべし。

如かず、須らく論難攻撃の筆と舌とをば擲却して、獨り曠野に立ちてかの大氣の廣潤に嘯かんに
は……………。

轉化の一面

半面に怒りて半面に泣き、半面に楽しみて半面に悶ゆるは、それ人間心理の常態にはあらざるか。

花に迷ふて、月に悟るも、則はち可、人間の性情は、人間心理の發露の作用を措いて、まな何事も
あることなけん。

歸するところは、半面の壓迫に對して半面の反抗の劇成あるべく、半面の調和に對して半面の諧同
の渾融あるべし。

英雄首べを回らせば即ち神仙、おゝそれ、融連無碍なる、かの人間性の轉化の一面を見ずや、

時と場合

放埒といふなかれ、露骨といふなかれ。

自恣放情、わが力捷つときは、則はちわれ驕らん、わが力敗るゝときは、則はちわれ死せん。

わが心、矯のず、偽らず、退縮と發揚とは、唯だその時と、只だその場合の、おのづからなる消長
に委せんのみ。

善智識

物は窮極に到りて、必ずや、一轉化を來たすべし。

思想に於ても、思索に於ても、推論に於ても、感覺に於ても、循環融通して、轉化の妙諦を打出し來るもの、それ何れもしかりとなす。

ほづるおもひの不思議さよ、歡樂極まつて人の心に哀感多しとかや、哀感果してなにものぞ、愁情わが心を悵ましむべしや。

遮莫、他山の石さへ以つて玉をも磨きつべし、哀感愁情、亦た時にわが微笑門の善智識にてあらずやは。

人類の歴史

茫茫幾千年、連綿起伏して興亡盛衰の波瀾ある人類の歴史は、人類の末裔たるわれ等にとりては最も尊重に値ひすべし。

さばれ、われ等は決して、歴史の囚はれ人にてはあらずかし。

個中の消息

濛々の雨ふる後ちに、はじめて、日光の美なるを見るべく、世情の悲慘事に號哭せしものにして、はじめて、歡樂の高價をば解せむなれ。
個中おのづから消息あり、おゝ吾れいまにおいて、なにすれぞ夫れ、わが説述の情懷を遲疑すべけんや。

大と小

大なるものは崇むべし、小なるものは愛すべし。

幼な子膝に上りて物言ふとき、誰れかその子の言に博引旁證の辯なきゆるをもつて、之れを蔑視し去らんとはするものぞ。

かれが純無垢に語るところ、またおのづから聴くべきものを含めばなり……。

過誤の分析

君よ、いたづらに、顯微鏡下の美を説く勿れ。

君はそれ、花の形態の美を見ずして、花を構成する、分子その物の美を見る人なり、而して、花の

美は花を構成する分子の美より成ることありとは、或ひは時として、之れを言ふべからめ、しかも直ちに、花の形態の美をば指さして、之れ則ち、分子其物の美なりといふことあらば、吾人は呵々としてその妄誕なる、背理の引例と立證をば嗤はんと欲す。
あゝそれ、分析の何ぞ誤れるや。

冗漫の絮説

君よ、いたづらに、物理講説の至上をば稱することを歇めよ。

音の傳達は、空氣の縦波動に由りて、吾人の聴覺に一種の顫律を惹起するものなることは、現今物理講説上の定理にやあらん、さはれ、學説上、百の定則あるも、人耳に要なき空中假設の所論のごときは、吾人の若かき現實生存に對しては、空然沒交渉に屬すべきにあらずや、吾人は好鳥美禽の啼音に對しては、恍惚として清興を發し、妙諦眞如を玩味するの生理的聽官を有するも、講堂に縷々萬言する、音波分解の演述のごときに對しては、頗る堪ふべからざるの倦怠と睡眠をば感ぜざる能はず。

あゝそれ、絮説の何ぞ過ぎたるや。

戀愛の子

戀愛の子、おのが思ひ人について語りて曰く……

彼れはわれをして多くのもの忘れしめたり、然れども又多くの本質的のものを覚えしめたり——と。

吾が知己

わが知己よ、汝が眼底よりその色盲の病ひを除けよ、而うして他意なく微笑めよ。

しからざれば、汝は生涯眞にわれを知る能はず。

快樂の辯

言の唐突をば咎むるなかれ、われいま、解脱したるの快樂と、解脱せざるの快樂について言を爲さんす。

既に一定の鍛錬あり、己でに一定の経過あり、自ら眞如の天地をば作爲して、悠々超越大我の妙

境に到達せる、これを之れ、解脱したるの快樂境となす、而うして又た、その爲すところ純無垢に天真、人をば欺かざるも、戀々低迷していまだ小我の柵内にあるもの、これを是れ、解脱し得ざるの快樂境とはいふ。

然り而うして兩者の中、解脱せざるの快樂の前には、常ねに幾多の衝突あり、恒ねに幾多の紛擾あり、つねに幾多の煩累あるも、解脱したるの快樂の前に於ては、これに何等の憂苦あるなく、これに何等の凝滞あるなく、これに何等の羈束あるなし。

おゝそれ、吾人は今まこゝにかの快樂を嘆美せんとはするものにはあらず、はた又た、吾人の問題は必ずしも快樂のみなりこはいふものにあらずと雖も、解脱せざるの快樂も、以つて度すなく、僞はるなくんば、尙ほ且つその行爲をもつて可となすべし、解脱せるの快樂にして、業でに昂然たり透然たり飄然たるところのものあらば、そのゆくところとして、何物の障擬かまたその行藏の前に立つて、敢てこれをば不可として遮ざるものあらんや。

具眼にして高嘯するこ無心にして微笑するとは、窮極するところに於いて則ち一、たゞかの混沌にして不淨、濁然として頭尾の別なく、怯懦と、汚行と、冷辱の衣被に隠れて、漫に小智の鎌を弄するやからに至つては、大喝してもつて快樂享受の利權をば剝奪せんかな。

沙上の本心

むづかしき顔^{かほ}の人よ、汝が顰蹙して澁面なるさまの何ぞ醜くきや。

人にして覺醒すべきの本心あらば、酔ふて沙上に伏す、亦た可ならずや。

火中の水

熱情の子、おのが愛人について語りて曰く、かの女はわれをして、つねに快惱として焦心せしむ、しかれども愉々として、春風の中に坐するがごこしと。

おゝ、彼れがごときは、火の中にありて水の甘美をたのしむもの乎。

斗酒

力なき子よ、汝の啣くむ盃の何ぞ小さなる。

ねがはくは大なる杯になみ／＼と注げ！斗酒一時に傾けつくして、豪蕩虹のごき氣を吐かむ、われいま幽閑の情懷に堪へず、われいま陰慘の生活に堪へず、おゝ、いまわが身と心の破綻を救ふも

のは、夫れ斗酒乎。

百般の世相

東隣の人は、憤激怒號せよ、西屋の人は、啼哭哀傷せよ、われいま浩歌拊躍して、呵々大笑せば……。

おゝ、百般の世相、これより生動せん。

主義

何事も主義をもつて、生存の常規をなすを好む人、新たに生れたる子に問ふて曰く、

生れたる子よ、汝はこの世に如何なる主義をもつて生れたるや——と。

生れたる子の答へて曰く、

主義とや……！ しかり、われは今ま生るゝ主義をもつて生れしなり——と。

背理の言

愛らしき兒、趨りゆきて、その父を呼ぶに母なりと叫びたり。

さはれ、われはその兒の背理なる言に對して、之れを尤がむるの言詞をば知らざりき、父と母とは共にその兒の親なればなり……。

海と泉

湛^たふるものをして、湛へしめよ、

流るゝものをして、流れしめよ。

海よ、泉よ、われは唯だその水なることを知らんと欲す。

或る子

或る子、生れて聲を放つて泣けり、

隣人耳を掩ふて、その聲を叱責す。

生れたる子、怒りて曰く、われは泣くが爲めに生れたり、汝の耳は何故にしかく狹隘なるや——。

祝ぎ歌

わかき身は、
 わかき日を祝ぐ、
 わかき日は、
 わかき子を祝ぐ、
 わかくして、
 こわに生きよ。

死の影

蔽ひたるもの、黒きもの、暗澹たるもの、陰濕なるもの、黙々たるもの、そはかの死の影の輪廓なれ。
 空々寂々として、水のごとく、波のごとく、風のごとく、浸たし、虫ばみ、呪ひ、襲ふ、生物の全
 べてを……。

頂 巔

さばれ、われ等いま、わかき驕りの生活の只中にあるものは、寸毫、死あるを意はず、死の襲來を
 懼るゝことなし、寧ろ、快然跳躍して、かの死の影と共に、抱擁亂舞せんことをすらこひねがふ。

歡樂の頂巔に、感興の頂巔に、情熱の頂巔に、わかき發育の頂巔に、天上天下陶然としていま立脚
 せるものにとりては……。

眼中死あるなく、胸中死を怖れず、將たまた、生命に對する何等の疑懼執着もなし。

吾人はたゞ、かの小心なるものゝ、生死に對する態度の、あまりに慌だしくも亦た、その仰々しさ
 をば嘲けり嗤はんと欲するのみ。

鏤刻の彩

かがやかの、
 鏤刻の彩も。のぞまじきかな、
 わかき死を得し、

み慕の上に。

人間の眞價

書籍(上)の名譽は、書籍を読むものと、書籍を作ることを能事とするのともがらをして適度にそをば爲さしめよ。

人間の對世間的價値は、對世間的に、互に相評價することを好むの集團をして、これを定めしめよ。但だし、人間本來的の眞價評定場なるものには、別にまたその廣大なる領域こそあらんなれ。

敵

吾人の生理的肉體は、肉體の生理的燃焼作用に必用なる、或る一定の食滋をば要求す。

人間の心も、人間の心の成育するまゝに、またそれ諸種本能的の欲望をば要求すべし。

故に、欲するところのものに、欲するところのものを與へずして、欲するところのもの、欲するところの心の燃焼と欲望とをまづ阻止せんとするがごときは、これ天意善導の道に負むきて、人の子の自然の發達をば損ふものにあらざるべき乎。

善惡眞偽の標準問題のごときは、暫らく不問に附せよ、而うして吾人をして、その、吾人の欲する

ところの心を枉^よげずして、しかも、人間としてその欲するところのものをば得せしめよ。

しかり、欲するところのものをば欲するところのものに與ふことなくして、漫に、その欲するところの出發的原因に干渉制裁を加へんとするがごときは、之れ斷じて吾人の心の(自由作業の)敵なりとなす。

寶 玉

わが生命は、過去にあらず、未來にあらずして、現在にあり。

現在の生活は、明日にあらず、昨日にあらずして、今日にあり。

而うして、今日の幸福を、今日の安神は、未來にあらず、過去にあらず、昨日にあらず、明日にあらずして、今日の生活の中にあり、あゝ何ぞ、いまにしてその他のことを思ひ煩ふを要すべしむ。

けに、けに、今日の生命に即して、今日の生活を、今日の生活に即して、今日の幸福と今日の安神を得たる今日の逢遇のごときは、われにしては、宛かも沙漠の中に拾得したる、寶玉の尊ふとさ

にも似たらんかな。

明日の価値

問ふなかれ、明日の価値あたいひ幾何ぞこ。

人生、今日の価値あたいひを措いて、また明日の価値あたいひありや、人生、今日の生存を虚うして、また明日の生存ありや、明日の価値あたいひは寧ろ今日の価値あたいひなれ、即ち、今日の価値あたいひありてしかる後ちの価値あたいひなれ、今日の価値あたいひの充實ありて爾かるのちの価値あたいひなれ。

おゝ、しかり、今日の歡樂、今日の感激、今日の邁往、今日の暢神、今日の榮光、今日の光彩は、則ち今日の価値あたいひにして、復た、しかうして明日の価値あたいひなりとも謂ひつべし。人儻し、明日の価値あたいひをつくらんが爲めに、敢て今日の価値あたいひを消盡し、明日の価値あたいひを贏ち得んがために今日の価値あたいひを犠牲にし去らんごするがごときは、そは悲しむべき無明の邪説の遂行にして、また無明の過誤の達成のみ、人の命ちを君知るや、一息心頭に滅却するとき、千載の光明夫れとこしなへになし。おゝ、さなり、さなり、故に吾人今ま敢て言はんごす、明日の価値あたいひのごときは、即ち、唯一無二なる今日の価値あたいひあるがために初めて尊ふとかるべく、若きに於いて老後の慰安を計劃し、な生き

がらにして死後の安住をこひねがふがごときは、人生、何ぞそれ違々たることの甚しきや、根を涸らして枝葉の繁茂を望み、果樹つちかに培はずして果實の良種を得んとするがごときは、轉倒の論理にあらざれば、轉倒の計算のみ、おゝそれ、かの無明の過誤と、無明の邪説に阿附する徒のごときに對しては、吾人その迂愚と迷蒙の、濟度すべからず、當るべからざることの深かきに、匙を投じて恐れおのゝかんと欲するものなり。

心の子

吾人の『心』は、精神の産褥たる、人間てふ一培養基に培養せられ、細菌分裂現象の場合のごとく今まし三個の核に分裂して、各一人の子を生めり。

第一の子は即ち、澁面執拗なる醜みにくき子にして、街學者となり、説教師となり、道學者となれり。
第二の子は即ち冷頭克心の愛せられざる子にして、學者となり、技術家となり、科學者となれり。
第三の子は即ち、活躍并舞の美しき子にして、功名の子となり、藝術の子となり、詩の子こなりたり。

しかも、人間年齒のわかき日の孵卵器的一装置内に於ては、これら三人の中、第三の子は營養最も佳良にして、發育最も旺盛に、又最も勇ましく成長して、人生至上の幸福と榮光に運動しつつあるを、之れ徒らなる空論にあらずして、實物標本上の所見となし且つ實驗立證となすものなり。

天の榮光

おゝ人よ、みだりに天の榮光をば説くこと勿かれ。

假りにいま之れを望むものも、之れを望むに、つぶさにその理路と情徑を盡して、然かる後ちにこれにたづさはるにあらざれば、ついにその恩浴の妙所に到達し能はざるものもせば、そこに之れをば能くし得るものと、能くし得ざるものとあり、將たまた、そこに之れをば好むものと、好まざるものとあり、吾人今日現在に於ける切實なる生活のごまきに對しては、これ等天の榮光説のごときは、あまりにそれ空疎にして人間味に乏しき啓示にてぞありつらめ。

餓えたるものにパンを與へよ、わかきものには、わかき歡樂の血を與へよ、而うして、われ等の肉と心の間隙に充實をば與へよかし、欲するものに、慾するところのものをば與へずして、みだりにその欲するまごころの心を天の一方に誘惑せんと計るがごまきは、即ちかの極光を望んで海洋に漂

流する、くらげのごとき多くの彷徨者も無生活者とをつくりいだすの迂愚にもひとしからんのみ。

おゝわが氷心一片、かの空疎にして偽善なる天の榮光の説者に欺かれず……………。

矛盾の眞理

無限の天地に有限の生類を生む、すでに矛盾となさめ。

矛盾の社會は矛盾の人類に由つて矛盾に組織せられ、矛盾の人類は矛盾の教育矛盾の觀察矛盾の學問に由つて、益々複雑なる矛盾の發達を助長しゆく……………。

しからは、矛盾こそは即ち天地の大法則にして、宇宙人類其他の一切のものに通する一大眞理にてはあらざるべき乎、否乎。

學者の標象

分厚つき書籍の頁の間に、押挿まれて萎みたる古々き花莖くきのあはれなる姿よ。

吾人はふとこれをば、讀書の際に發見して、またなく痛切に世の學者の末路のほどを思ひやます……。

水分なきかれらの人生よ、あはれなる學者の枯れさらばひたる末路よ、書籍の間の打萎みたる花莖の姿こそは、げにそれ好個なる學者そのものゝ如實なる標象にてありけるかな。

人生の至樂

人を愛すると人に愛せらるゝとは、それ人生の至樂にてありつべし。

ナザレのイエスは何をか説きし、さばれ、青春熱烈の情火に燃えて、わかきわれらが相愛の愁思を暢ぶるも、また何の罪とするところかあるものならんや。

乞ふ、過ぎたる分橋の眼をもつて、みだりに愛の性質をば詮議することなかれ、愛の性質は天よりすると人よりするこにかゝわらず、また、博ろき意味に於いてすると、隘まき意味に於いてするこにかゝわらず、いづれも同一軌道を駛るの閃光にして、人を愛し人に愛せらるゝは、げに、げに、わが人生の至樂にてこそありつるかな。

心靈と肉體

靜山鳴動して火焰を噴き、寒水騰沸して雲霧を發す、靜中に動亂あり、動中に靜處あり、花爛漫たるとき突風到り、波平かなるとき魚龍潛躍す、しかも、これらはいづれもそれ、かの大自然の景趣を添ふべくして、必ずしもかれが運行卷舒の疾ひにあらず、而うして、圓滿にして虚心靜平なるわが全我宏懷の中にありて、時に心靈と肉體との鬭争葛藤あるがごきも、これすなはち、吾人人間の美點となして、強いて苦惱排斥すべきの要を見ず、寧ろその機中の活處をば把握して、以つて全我擴大の完成に資せんには……。

心靈と肉體の鬭争葛藤、吾人必ずしも、わが身中の病ひみなさざるなり。

醉生夢死論

115

世に、醉生夢死なる語あり。

人により、語義により、如何に解釋すべきことの、その眞に邇かゝるべきかを知らずといへども、胡んぞその詞の美にして、何んぞその意の麗なるや。

人にして、酔はざるの「生」あらば、いきとしていけるの間、何んのそれ人間生活上の樂しみ乎あり、將た又た、何んのそれ吾人生存上の立命乎あるものならんや。

人にしてまた、夢のごときの「死」あるなくんば、人生は畢竟、憂患的、苦惱的、刑罰的、地獄的悲劇の一修羅場たらんのみ。

詮するところ、人間世界の生死は、その何故に生れきたり、その何故に死にゆくやの意義分明ならざるところに、甘味あり、憧憬あるべし。

「生」の、あまりに意義あり、「死」の、あまりに明瞭なるは、兎角に興味乏しく面白味少なきものにして、終には腹味戀着を失ひ、生々活躍と行動潑々の眞氣をば失ふに至るべけん。

吾人は、何のためにみづから生きつゝあるかも鮮明ならざる、人間世界の醉生夢死的境地にこそ、生存享樂の安易はありと思惟す。

たとへ、些末の進歩的傾向の促進あるとも、かの劃一的、強制的、多食的、獨占的、引率的、生活様式と指導的、鞭撻的、穿鑿的、論理的、生活指示とに、それいくばくの安息と安住をば期待し得べき。

人よ、吾人を目して、敢て詭激の言と有耶無耶の説を弄するものみなすことなかれ、かの覺めたりと誇り、醒めたりと慢するもの、それ復た、いくばくか覺め、いくばく程度に於いてか醒めたるべきぞ。

きぞ。

借問す、人間在來の理智考量そのものごときも、果してそれ、いくばく深度と、いくばく透徹の偉力をば有しあるべきや。

吾人はいま、人間世界の主義學說のすべての拘泥をばうち棄て、甘んじて、酔ひたるものゝ生をたのしみ、夢みるごとき死の國にゆき就かなんことを憧憬す。

而うして、虚無にあらず、厭世にあらず、宗教にあらず、科學にあらず、唯理論にあらず、諦觀思想にあらず、儂かなき現實の存在に、儂かなからざる機縁の心を繋なく、新らしく、興味おほ鏡きき、

みづからの醉生夢死論にこそは陶醉せんことを欲す。

おゝ夫れ、高く、これをば街頭に提唱なさんかな。

大正十二年九月五日印刷
大正十二年九月十五日發行

(定價金壹圓)

不許
複製

著者 永井陸奧郎

發行者 永井正三郎

印刷者 渡邊 一

東京市外西巢鴨町池袋六一二五
印刷所 光文社印刷所

東京市外西巢鴨町池袋六三一

發行所

東華書院

電話小石川四六七一番
振替東京六八六六五番

536
5



1
2
3
4
5
6
7

終

